

圖 版



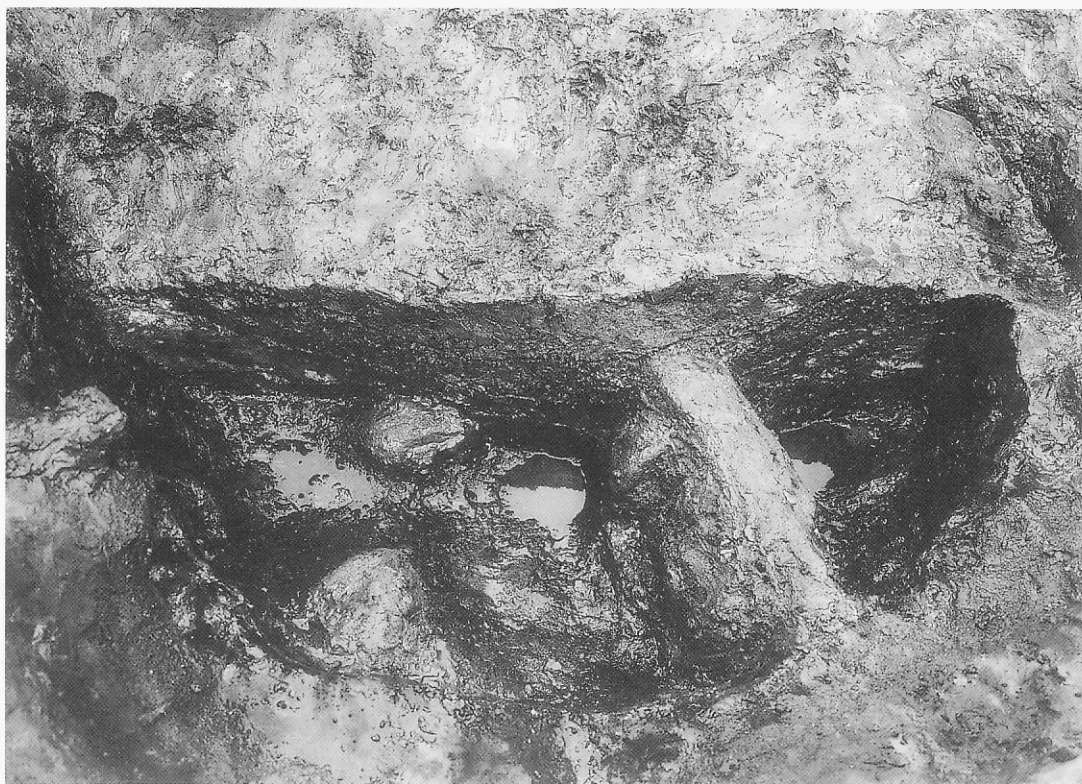
1、調査区全景(上が北)



2、調査区周辺の現況(東より)



3、82SK067 木材検出時 (西より)



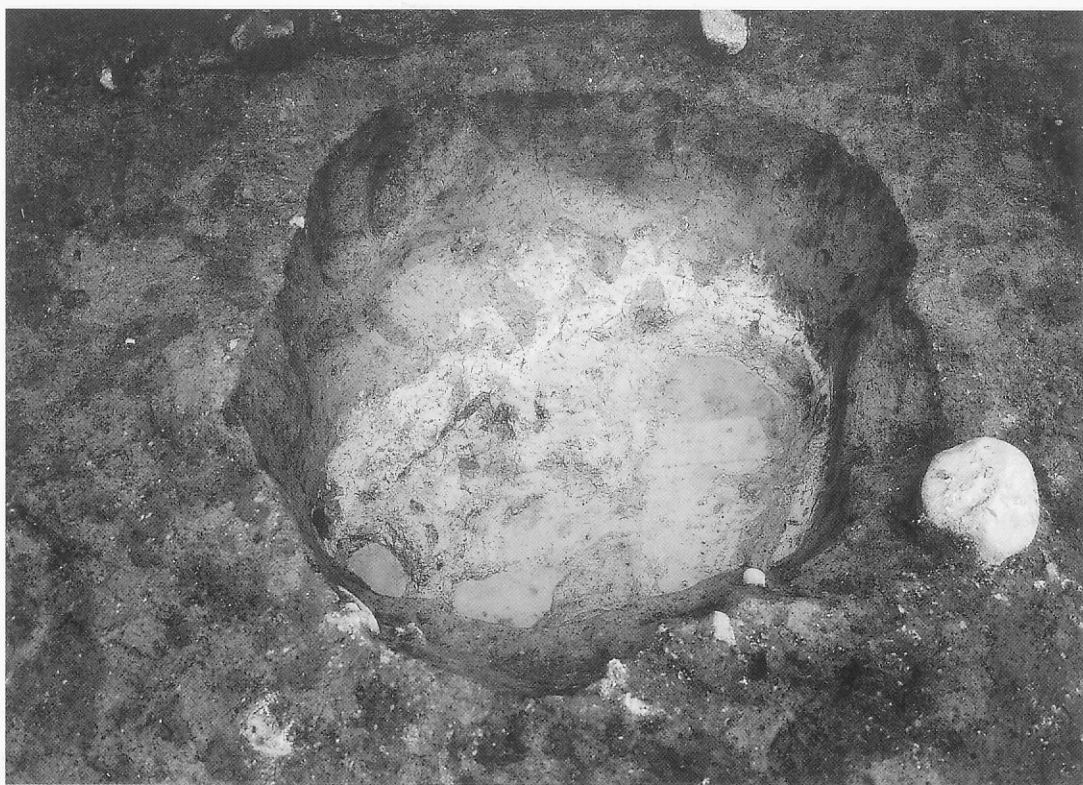
4、82SK067 土層観察時 (西より)



5、82SK052 完掘時(西より)



6、82SK052 土層観察時(西より)



7、82SX064完掘時(西より)



8、82SX064土層観察時(西より)



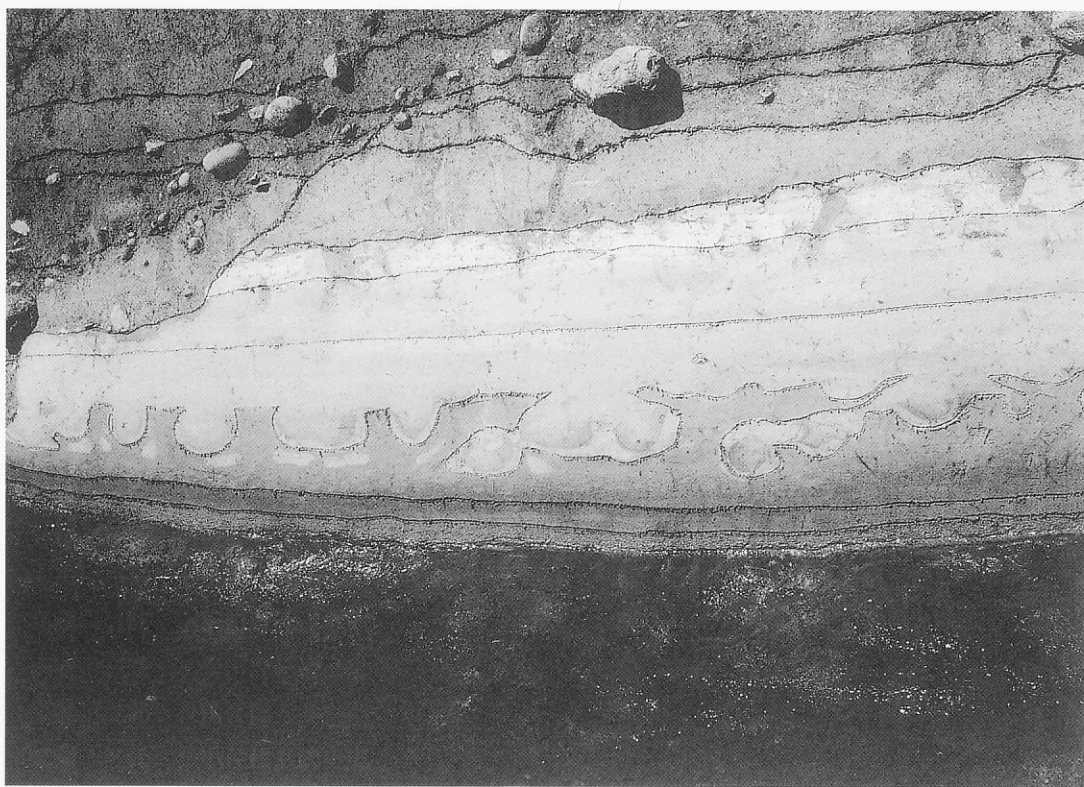
9、82-2次第2面遺構完掘時(北より)



10、82SX066土層観察時(西より)



11、A 区北西調査壁土層観察時(西より)



12、A 区中央土層噴砂観察時(西より)



13、砂層遺物出土状況(北より)

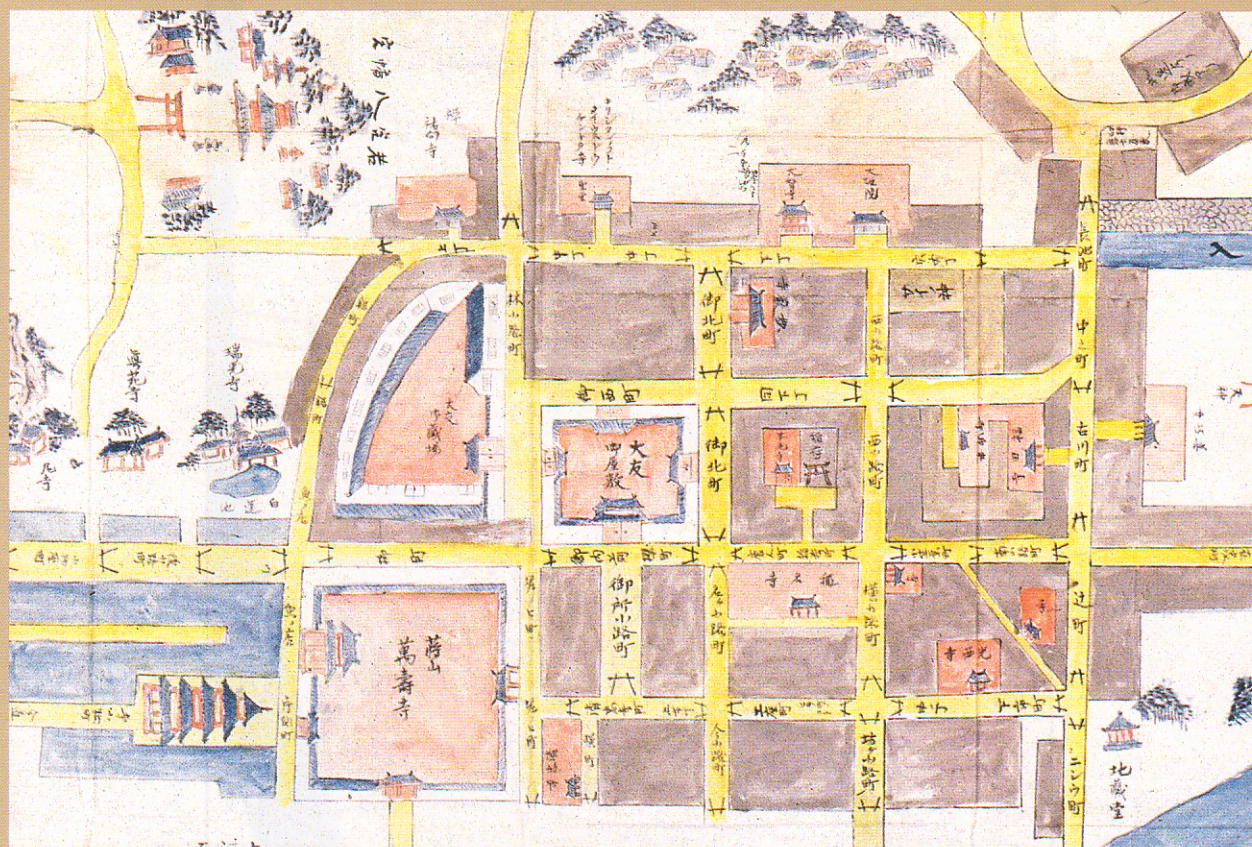


14、丸木材切り込み部近景(西より)

国指定史跡

大友氏館跡

— 發掘調查概報Ⅲ —



2002

大分市教育委員会



第1図 戦国時代の府内復原想定図(『大分市史中巻付図Ⅱ』)

例 言

1. 本書は平成13年度に大分市教育委員会が実施した推定大友氏館跡における埋蔵文化財確認調査の概要報告書である。
2. 発掘調査の費用は、国と県から補助金を受けて、大分市が負担した。
3. 調査および本書の編集は塔鼻光司、池邊千太郎、高畠豊、永松正大、羽田野裕之が担当した。各章の執筆は、第1章を塔鼻、第2章1を池邊・羽田野、第2章2を永松、第2章3を高畠、第3章を池邊・羽田野、第4章を池邊・高畠・永松・羽田野が担当した。
4. 遺構の写真撮影ならびに遺物の写真撮影は、池邊・高畠・永松・羽田野が行った。
5. 出土遺物の整理・実測・トレースは工藤雄実子・中山麻理子・小山田裕子・武田真知子・大島紅・長木恵里子(大分市教育委員会文化財課臨時職員)が主としてこれにあたり、橋本幸子・武藤由紀子・佐藤公美・佐藤容子(大分市教育委員会文化財課臨時職員)の協力を得た。
6. 本書に用いた方位はすべて座標北(G.N.)である。また、基準点の座標値は平面直角座標系第Ⅱ系による。
7. 陶磁器の種別分類の内、白磁は森田勉氏の分類、青磁は上田秀夫氏の分類、中国産染付は小野正敏氏、備前焼は乗岡実氏の分類をそれぞれ用いた。
8. 遺跡名に関しては、その構成要素である町屋部分を「中世大友府内町跡」とし、これに「大友氏館跡」を加えた遺跡総体を「中世大友城下町跡」と呼称する。
9. 本書で使用した遺構表記は以下の通りである。

SD 溝状遺構 SE 井戸遺構 SK 土坑
SP 柱跡遺構 SX 性格不明遺構(整地層)

◆目 次

第1章	はじめに	1
1	調査に至る経過	1
2	調査組織	1
3	これまでの調査歴	2
第2章	調査の概要	3
1	大友氏館跡第10次調査	3
2	大友氏館跡第11次調査	14
3	中世大友府内町跡第19次調査	18
第3章	遺物について	22
第4章	まとめ	25
1	大友氏館跡の四至	25
2	大友氏館跡の内部施設について	26
3	今後の課題	26

第1章 はじめに

1 調査に至る経過

大分市では、平成7年度より21世紀の県都としてふさわしい都市機能の充実を目指し、駅高架事業と駅南地区の区画整理事業を基幹とする駅周辺総合整備事業を展開している。しかしながら、この事業対象地区には中世大友城下町跡が存在しており、事前の発掘調査が実施される事となった。

このような状況の中、今年度は昨年調査を実施した、大友氏館跡第6次調査・大友氏館跡第9次調査の詳細確認と大友氏館に関連性の強いと思われる南北土塁(中世大友府内町跡第8次調査)の延長確認を目的として、大友氏館跡第10次・11次調査及び中世大友府内町跡第14次調査を実施した。

また、第1次大友氏館跡の国史跡指定申請は、地権者の同意を得る事の出来た8物件について、平成13年2月に文部科学大臣に申請し、5月16日に文化審議会の答申を経て、平成13年8月13日に官報告示を得たところである。さらに、平成14年3月19日には追加指定を得る事ができた。

2 調査組織

調査指導者	河原 純之 (川村学園女子大学教授)
	後藤 宗俊 (別府大学教授)
	小野 正敏 (国立歴史民俗博物館助教授)
	坂井 秀弥 (文化庁保護部記念物課調査官)
	渋谷 忠章 (大分県教育庁文化課課長補佐兼埋蔵文化財係長)
調査指導	大分県教育委員会
調査主体	大分市教育委員会
	教育長 御杵 義則
事務局	大分市教育委員会
文化財課	課長 帯刀 修一
	主幹 玉永 光洋
	課長補佐 讃岐 和夫、熊谷 一秋
	指導主事 後藤 典幸、甲斐 猛、姫野 公德
	主任 幸 裕美
	主任技師 塔鼻 光司、坪根 伸也、池邊千太郎、塩地 潤一
	技師 高畠 豊、河野 史郎
	主事 永松 正大、三浦 亜紀
発掘作業員	安部 弘明、井野和歌子、加藤 芳男、後藤 好美、小村 知治
	利光 克寛、深津イツ子、柴田アイ子、後藤 春美、森田 秀夫
	橋本 弘、広岡サヨ子、安東 信二、長岡 宣子、長岡 直義
	長岡 照実、上野 美奈、小浦 伊策、一宮 安男、安部 康子
	市野瀬勝正、植田 高夫、池邊光太郎

3 これまでの調査歴

先述のとおり、駅高架事業と駅南地区の区画整理事業に伴い、平成8年度から9年度にかけて大分市教育委員会により、中世の横小路町比定地での調査(中世大友城下町跡第1次～第3次調査)、また、平成8年度の確認調査では4基の巨石(後の大友氏館跡第1次調査で庭園遺構の景石と判明)が発見されるなど館関連と思われる中世の遺構が検出された。

これを受けて、大分市では大友氏関連遺跡の歴史的重要性を考え、平成10年度から平成11年度始めにかけて遺構確認調査を実施した(大友氏館跡第1次調査)。

その結果、巨石を配し、池を伴う大規模な庭園遺構が検出され、この地点が館内部である可能性が極めて高くなった。また、これと時期を同じくして、館推定地内の西側外郭線付近で館に伴うと推定される大規模な土塁遺構や、整地遺構が検出(大友氏館跡第2次調査)されたことなどから、大分市教育委員会では大友氏館比定地が実際に大友氏の館跡である可能性が高いと判断し、県教委・文化庁と協議を重ねた結果、平成11年3月に文化庁から国史跡指定に向けての方向性が出された。大分市教育委員会では、庭園遺構が検出された第1次調査を受けて大友氏館跡第3次調査(平成11年11月～12年3月)、推定大友氏館のほぼ中心付近の調査(大友氏館跡第4次調査)、第2次調査で確認された土塁の延長を確認するために大友氏館跡第5次調査を実施した。

翌平成12年度には、第4次調査区東側の周辺より高まりのある部分の確認調査(大友氏館跡第6次調査)を実施し、大型建物関連遺構を発見することができた。

館北限部分の調査(大友氏館跡第7次調査)では、北側を画すると思われる溝状遺構を確認した。

また、第5次調査区の東側に隣接した大友氏館跡第8次調査では第5次調査の延長が確認され、大友氏館跡第9次調査では、大友氏館跡第7次調査で確認された館北限溝の東部分が確認された。

大分市教育委員会の調査と平行して、大分県教育委員会でも駅高架並びに国道10号線の拡幅等で、中世府内町の発掘調査を平成11年から実施している。

これまで、大友御蔵場の北側築地塀の発見(中世大友府内町跡第5次調査)を始めとして、大友氏館に関連すると思われる大型の溝状遺構・土塁遺構(中世大友府内町跡第8次調査)、大友氏館東側に面した南北大路(中世大友府内町跡第12次・第18次調査)と名ヶ小路の交差点並びに木戸の跡(中世府内町跡第12次調査)などが発見されている。

遺物についても、キリシタンとの関係を示唆するコンタやメダイなどの遺物、また中国華南地方・タイ・ミャンマー・ベトナムなどの陶磁器類が大量に発見されるなど、中世の国際貿易都市「府内」の繁栄ぶりを徐々にではあるが、その姿を現わしてきている。

第2章 調査の概要

1 大友氏館跡第10次調査(推定大友氏館跡の北側外郭線地区)

調査区について

第10次調査は、推定大友氏館の北側外郭線に沿った場所に位置する。当調査区では、二つの調査地点(A地点・B地点)を設定した。A地点は平成12年度に調査を行った第9次調査区を含む位置である。B地点はA地点よりも約16m南側にあたる。調査地点の各面積は、A地点が約42㎡、B地点が約32㎡を測る。

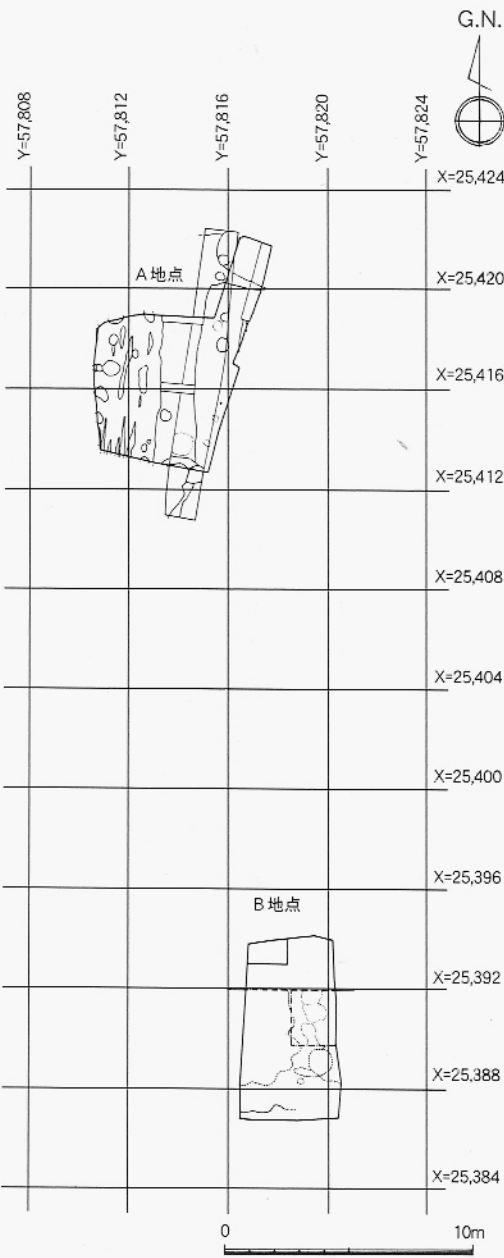
A地点の調査概要

A地点は当調査区の中で北側に位置しており、推定大友氏館の北側外郭線に相当する場所である。土層観察と平面検出により地山から6層の整地層からなることが確認でき、中でも第4面・第5面において遺構が検出された。特に第5面では調査地点北側で東西方向に延びる溝状遺構、中央で南北方向に延びる溝状遺構を確認した。

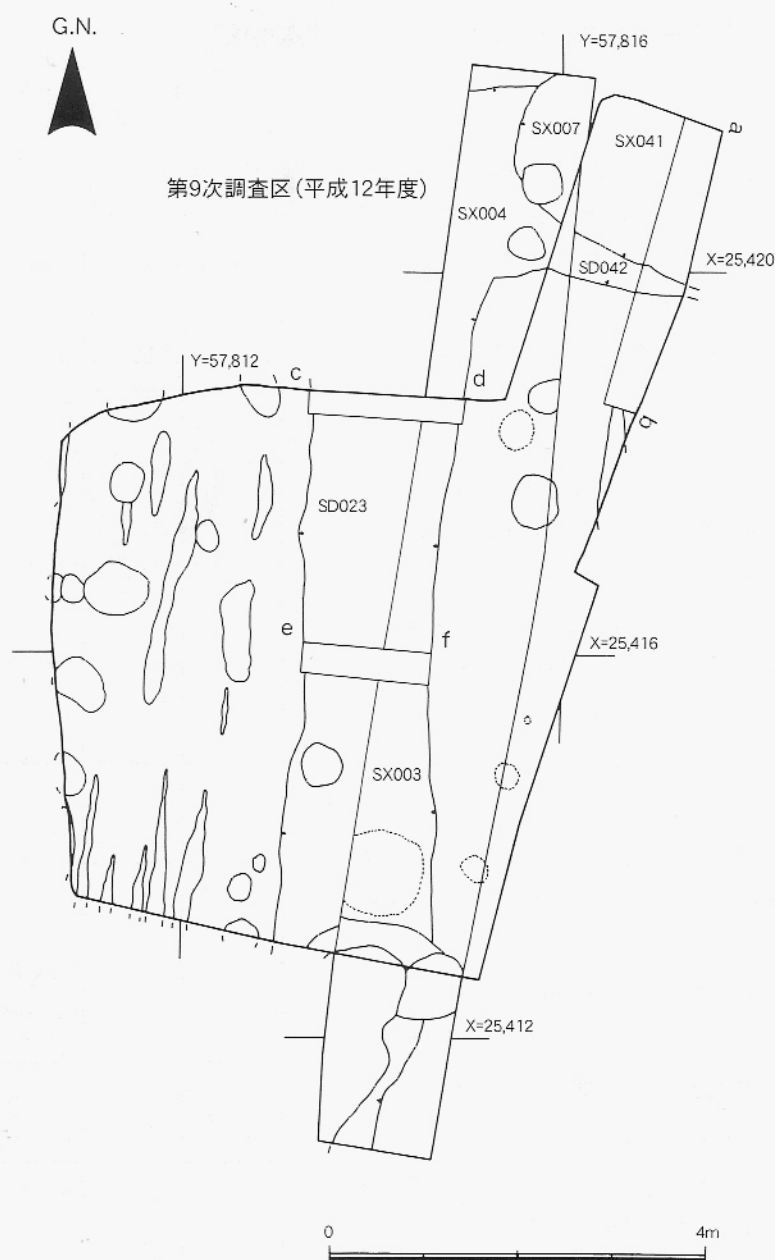
調査地点北側で検出された東西方向に延びる溝状遺構(SX041・SD042・043・044)は何度も造り替えが行われている。これらの溝状遺構は、大友氏館の北側推定外郭線上に位置しており、これに関連する遺構であると考えられる。溝状遺構は、土層観察による切り合い関係から(旧)SD044～SD043～SD042～SX041(新)という変遷過程が追える。

最も古い時期の溝状遺構(SD044)は、新しい溝状遺構の掘り返しによって南側の掘り方のみが確認された。さらに溝状遺構は、2度ほどの掘り返しが行われており、最終的には、溝状遺構(SD043)の掘削が認められる。その規模は、推定幅約2.2m、深さ約1.2mでY字形の掘り方である。なお、これらの溝状遺構は、地山上面に形成された硬くしまる砂混じりの6面が溝状遺構に沿って東西に積まれ、溝状遺構内に土砂の流入を防ぐ目的で形成されたものと考えられることから、この面より掘り込まれたものと想定できる。

溝状遺構(SD043)が作られた後、整地地業によって厚さ20cm以上の整地層(5面)が形成される。この時点で溝状遺構は一度埋められている。そして再び5面整地層より溝状遺構(SD042)の掘削が見られた。規模は推定幅約2.2m、深さ0.8mで緩やかなU字状の掘り方である。北側の肩部は調査区外に延びている。土層観察からは、最下層の床面にグライ化した層が見られることから、滞水していた痕跡を留める。これ以外の溝状遺構に関しては遺構内に砂質土の地山からの流れ込みが著しく、滞水の状況は見られなかった。最終的に溝状遺構は、掘り返し(SX041)が確認できた。この遺構は、平成12年度に第9次調査として調査を行ったSX007と平面的につながるものと考えられる。しかしながら、SX007は弧を描いて西側で遺構が収束しているために長土坑の形状を呈する。



第3図 調査地点位置図(1/300)



第4図 A地点 遺構配置図(1/80)

なお、溝状遺構に付随して南側(館の内側)には、土塁や築地塀などに関連する遺構は確認できなかった。このことから、館を囲む施設があるとすれば東西方向に延びる溝状遺構の外側に展開することが考えられる。

一方、南北方向に延びる溝状遺構(SD023)は、東西方向の溝状遺構に直交するように検出された。規模は、幅約1.4m、深さ約0.8mで掘り返しが見られる。遺構は5面の整地面で確認されており、土層観察と切り合い関係からSD041・042と同一検出面であるが、SD042との新旧関係は不明である。4面の整地層が形成されるときには、すでに溝状遺構は埋められている。

また、SD023の西側には、南北方向に何本もの長い溝状の窪みを確認した。さらに5・6面においてピットを確認したが、建物となるような遺構は確認できなかった。

A地点における各面の年代は、3面が器壁の肥厚した京都系土師器(第12図1)、唐津産陶器皿(第12図2)、碗等が出土していることから16世紀末から17世紀初頭の年代が考えられる。4面からは、漳州窯系染付皿(第12図4)等が出土していることから16世紀後葉から16世紀末と考えられる。

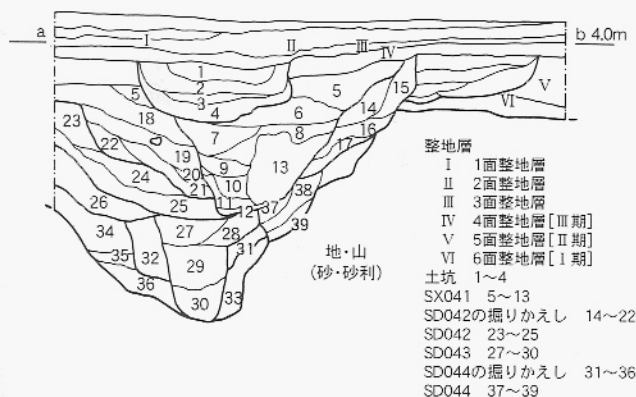
溝状遺構から出土した遺物は、少量のために溝状遺構の時期を厳密に決めることは困難であった。SX041からは、中国産白磁碗(第12図5)・陶器壺(第12図7)等が出土しているものの積極的に年代を決めることはできない。層位的には、4面の整地層よりも下層に位置することから16世紀後葉以前と考えられる。なお、最下層に位置する溝状遺構(SD044)からは遺物が出土していないために時期は不明である。

B地点の調査概要

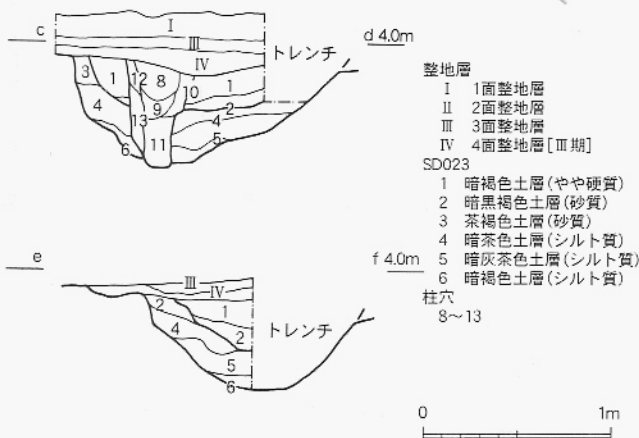
B地点は主殿が推定される大友氏館跡第6・11次調査区の北側約30mに位置する。また、調査地点は、明治時代初期に作成された字図から東西方向に延びる地割の北側に沿った場所にあたる。遺構検出においては、一部で現在の攪乱が見られるものの、保存状態はほぼ良好であった。遺構は、4面にわたってそれぞれ検出された。

今回検出できた最下層の4面では、標高3.6m付近に位置し、この面から掘り込まれた不定形の廃棄土坑(SK040)を検出した。遺構は、深さ約15cm、長さ3m以上にわたって広がっている。土層観察からは不鮮明ながらも分層でき、断続的に遺物が多量に廃棄していったことを窺い知ることができる。土坑内からは、京都系土師器とロクロ成形土師器が比率的に9対1の割合で混在し、多量に出土している。出土した京都系土師器は、3面で出土する京都系土師器に比べ口径が大きいものが含まれ、器の底部の厚みが薄く、口縁部が外反気味のものが多く見られる。遺構の時期については、ロクロ成形土師器が混入することや、中国産白磁皿(第16図130)・中国産染付皿(第16図131)が共伴していることから16世紀前葉を中心とし、16世紀中葉までの範疇として捉えられる。

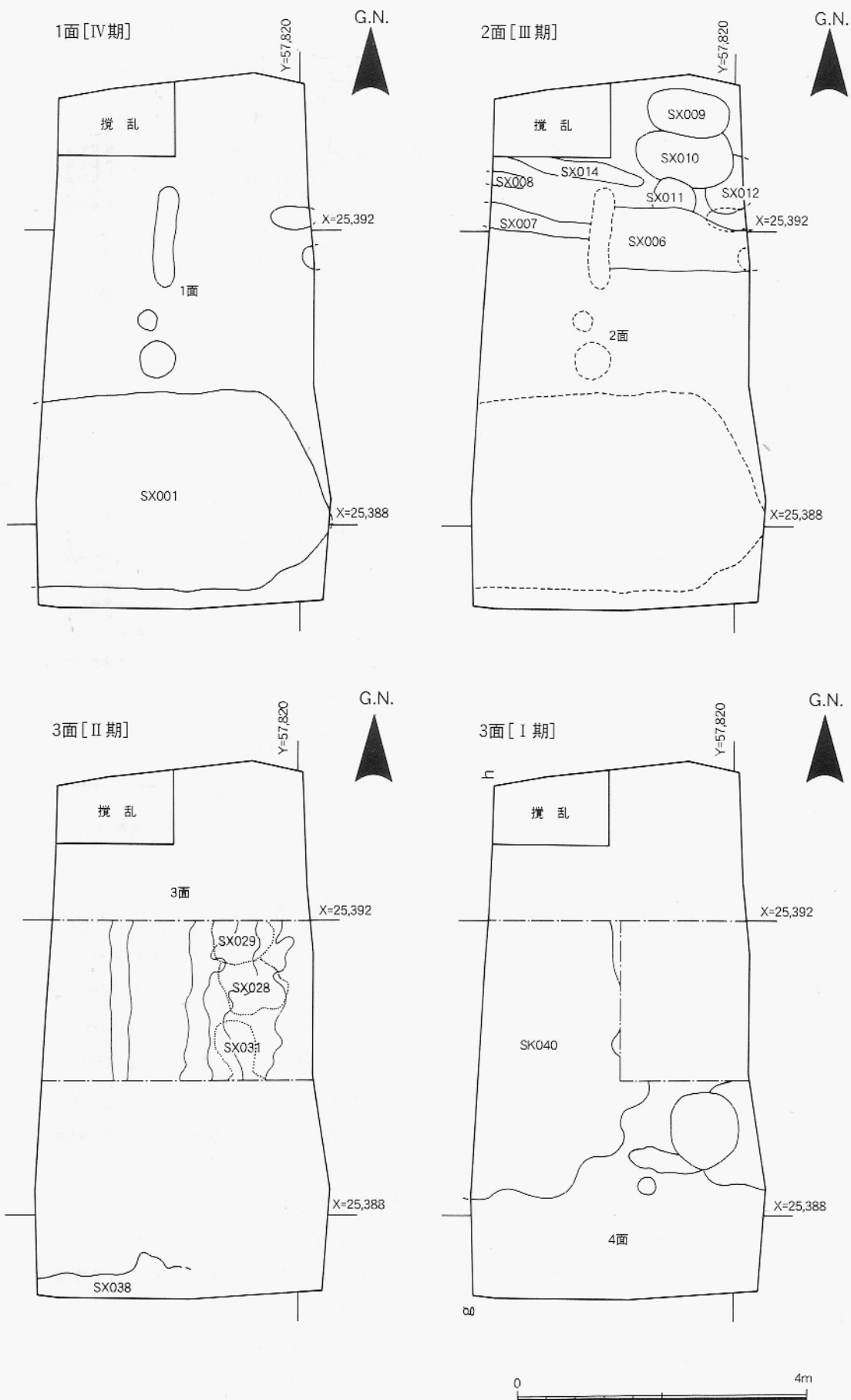
3面は、4面の上層に位置する厚さ約40cm程の整地層である。この整地層は、地山に見られる砂とシルト質土の土を交互に入れて短期間で整地を行っている。整地は、最終段階でおよそ1m間隔にわたり、南北方向に向かって幅30～40cmの茶色シルト質土を帯状に積んでいる。そして、その間に砂を入れていく作業方法を行ない、最後に砂混じりの締まった土を全面に覆うように敷いている。



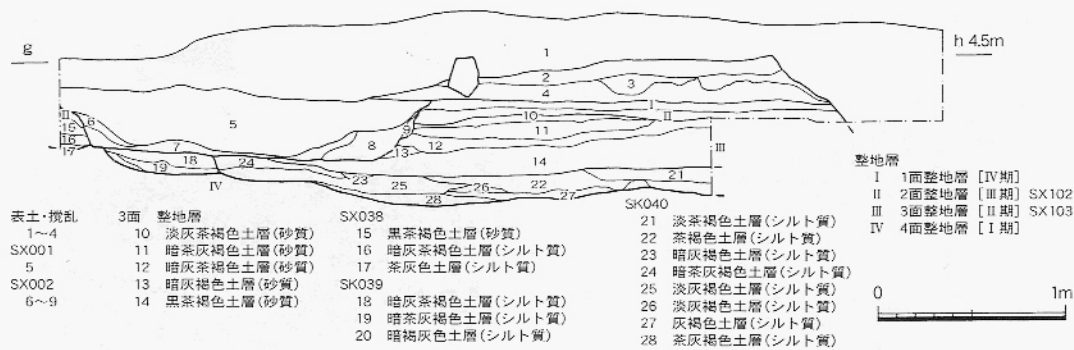
第5図 A地点東西溝(SX041・SD042・043・044)土層断面図(1/40)



第6図 A地点 南北溝(SD023)土層断面図(1/40)



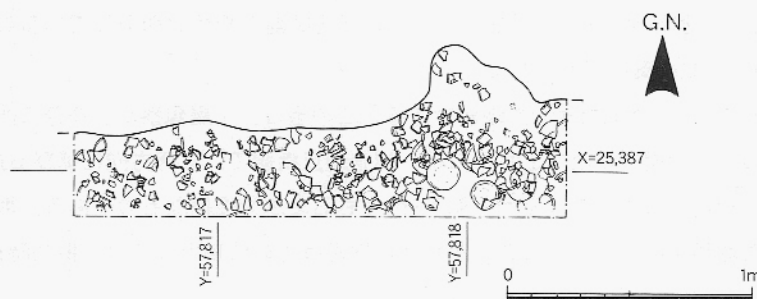
第7図 B地点 遺構配置図(1/80)



第8図 B地点 調査区西壁土層断面図(1/40)



第9図 B地点 3面整地内(SX028・029・031)廃棄遺物群平面図(1/30)



第10図 B地点 3面整地内(SX038)廃棄遺物群平面図(1/30)



第 11 図 B 地点 廃棄土坑(SK040)遺構平面図(1/30)

この整地作業の途中段階では、砂を入れた部分に多量の京都系土師器をまとめて一括廃棄した状況が確認された。出土状況は、ひとつの範囲がおおよそ直径80cmほどで京都系土師器が幾重にも折り重なるような状態であり、それが数カ所に連続して分布している。中には、土器に炭が付着した状態で廃棄されたものも確認できるが、土器が2次的に比熱を受けていないことから廃棄処理する段階で混入したものと考えられる。時期は、出土した京都系土師器にロクロ成形土師器が混入されていないことから16世紀中葉と考えられる。また、調査区の南壁においても多量の京都系土師器が一括廃棄された遺物群(SX038)が確認されている。現状での検出された範囲は、南北約1m、東西約2mであるが、その大半が調査区外に延びていることから南側にも遺物の廃棄が広がることになる。

2面(SX102)は、3面の土層にあたり砂質土で積まれた厚さ7cmの整地層である。この整地層には、多量の京都系土師器が出土しているほか、検出作業によって浅い溜まり状の部分に京都系土師器が出土している。溜まり状の部分は、溝状になったものや直径1mほどの楕円形の形状を成すものである。

これら2面から出土した京都系土師器は、3層出土の京都系土師器と形状が類似していることから時期差は少ないものと考えられ、16世紀中葉に想定される。

1面は、表土を剥いで検出された最上層の整地層である。この層は、土層観察から鉄分の沈着が見られることから水田盤となっている。この面で検出できた遺構は、調査地点南側で、東西方向に延びる遺構(SX001・002)である。なお、東側では遺構が収束しているが、幅2.3mにもおよぶ大規模なものである。埋土中からは、昭和時代のガラス製品や陶磁器類が出土していることから最終埋没はこの時期となるが、掘削時期は不明である。

出土遺物

出土遺物はB地点からの出土量が圧倒的に多く、A地点からの出土は少ない。

B地点から出土した遺物は、廃棄土坑や整地層からのものであり、数百点にもおよぶ大量の京都系土師器およびロクロ成形土師器が大半を占める。

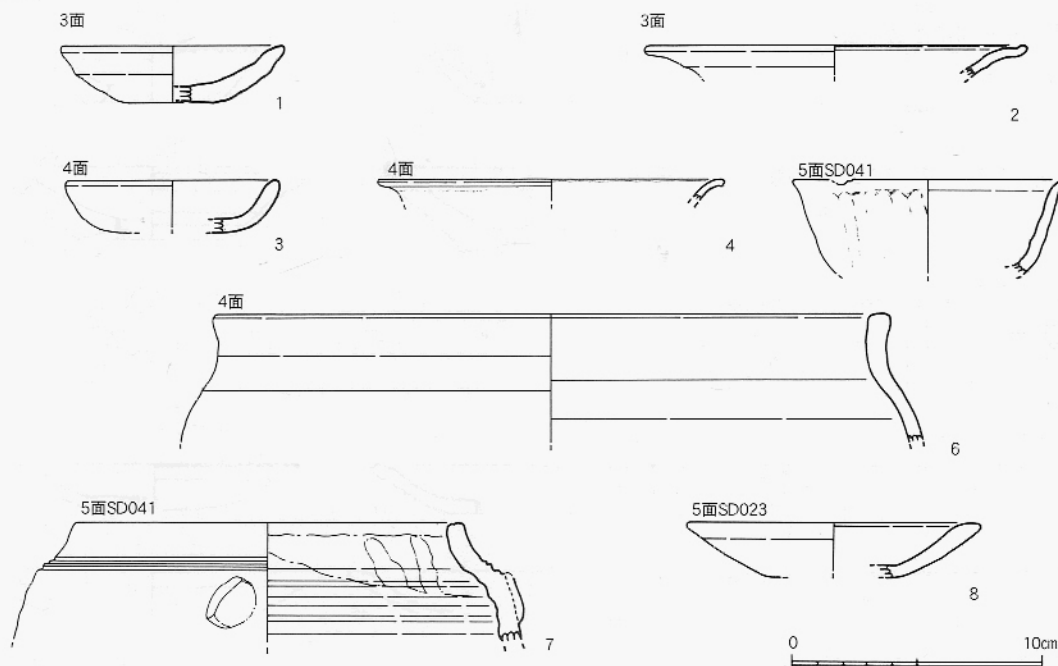
2面には、整地層であるSX102と溜まり状の遺構から出土した京都系土師器が見られる。遺物は、京都系土師器(第13図9～13)、防長系瓦質すり鉢(第13図14)である。

3面では、整地層であるSX103と整地作業の途中段階で大量に一括廃棄されたSX028・029・031・038に京都系土師器が出土している。これらの遺物は、3面の整地時に廃棄されたものである。図示にあたっては、法量と形態を加味したうえで、均等に選別したものである。なお、大半の遺物は、京都系土師器であるが、整地層のSX103にロクロ成形土師器が数点出土しているのは4面のSK040から混在した可能性が高い。

SX103は京都系土師器(第13図15～30)・ロクロ成形土師器(第13図31～36)・中国産白磁皿(第13図37)、SX028は京都系土師器(第13・14図38～54)、SX029は京都系土師器(第14図55～68)、SX031は京都系土師器(第14図69～79)、SX038は京都系土師器(第15図80～86)が出土している。

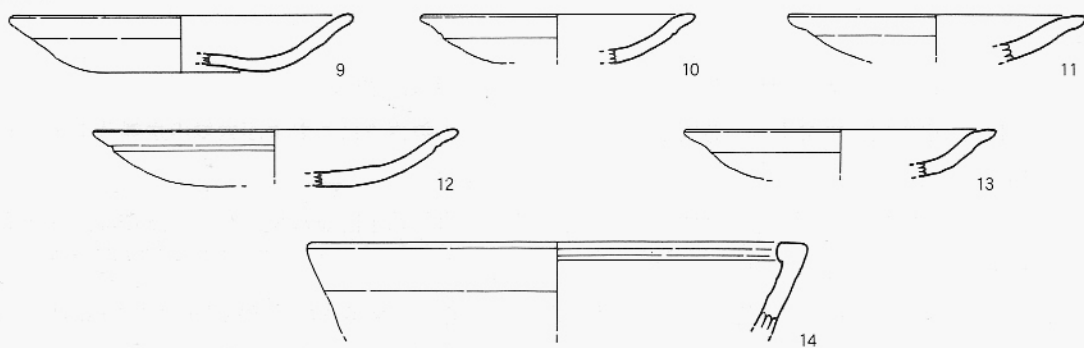
4面は、廃棄土坑であるSK040からの出土が顕著であり、ロクロ成形土師器が出土しているものの、主体は京都系土師器である。遺物は、SK040の西側壁に設けた土層観察用のトレンチから出土したものが大半である。図示した遺物は、京都系土師器(第15・16図89～117)・ロクロ成形土師器(第16図118～129)・中国産白磁皿(第16図130)・中国産染付皿(第16図131)である。

A地点

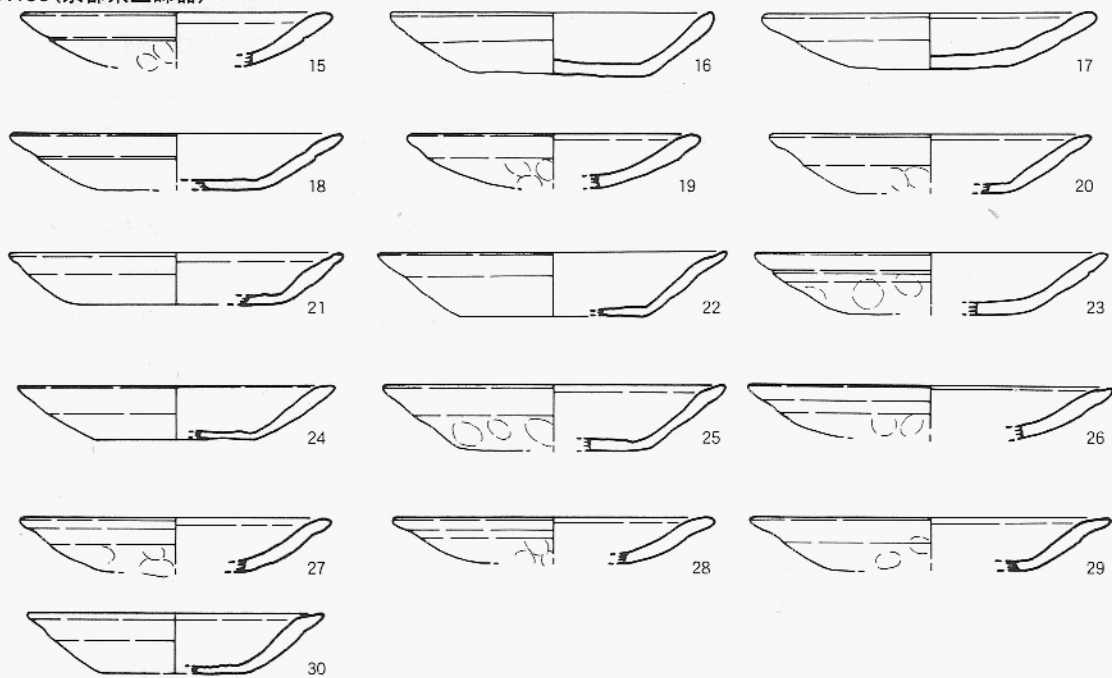


第12図 A地点遺物実測図(1/3)

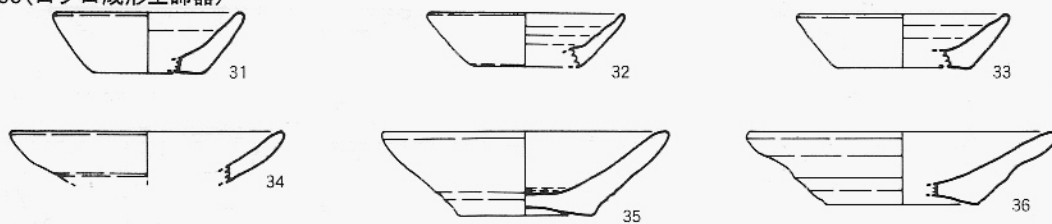
SX102



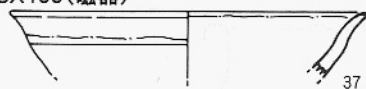
SX103(京都系土師器)



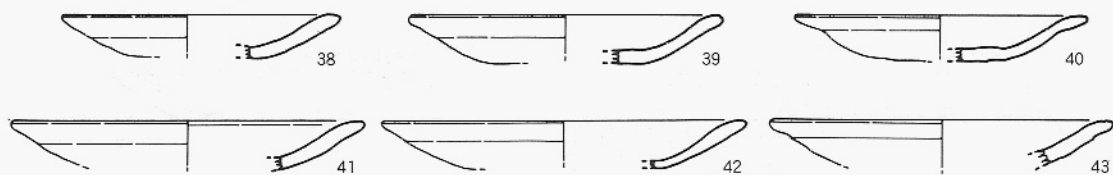
SX103(口口成形土師器)



SX103(磁器)

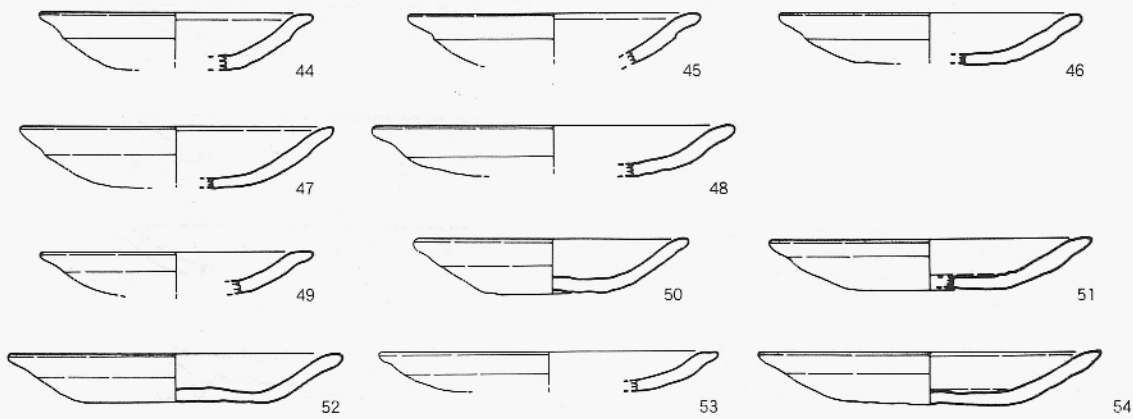


SX028

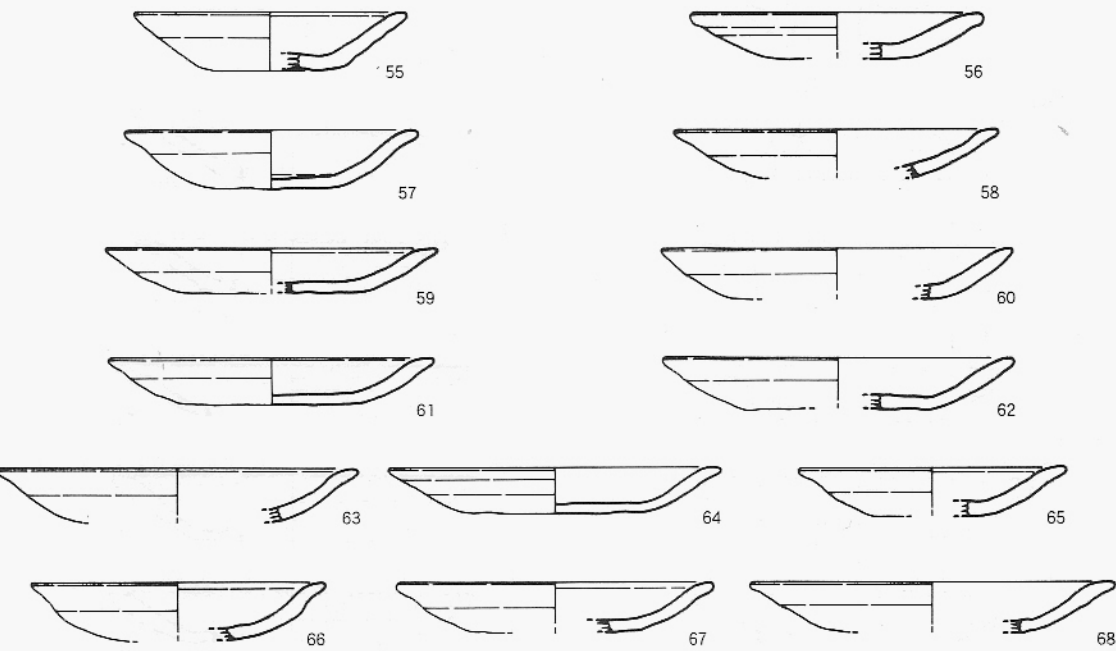


第13図 B地点遺物実測図①(1/3)

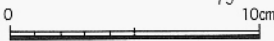
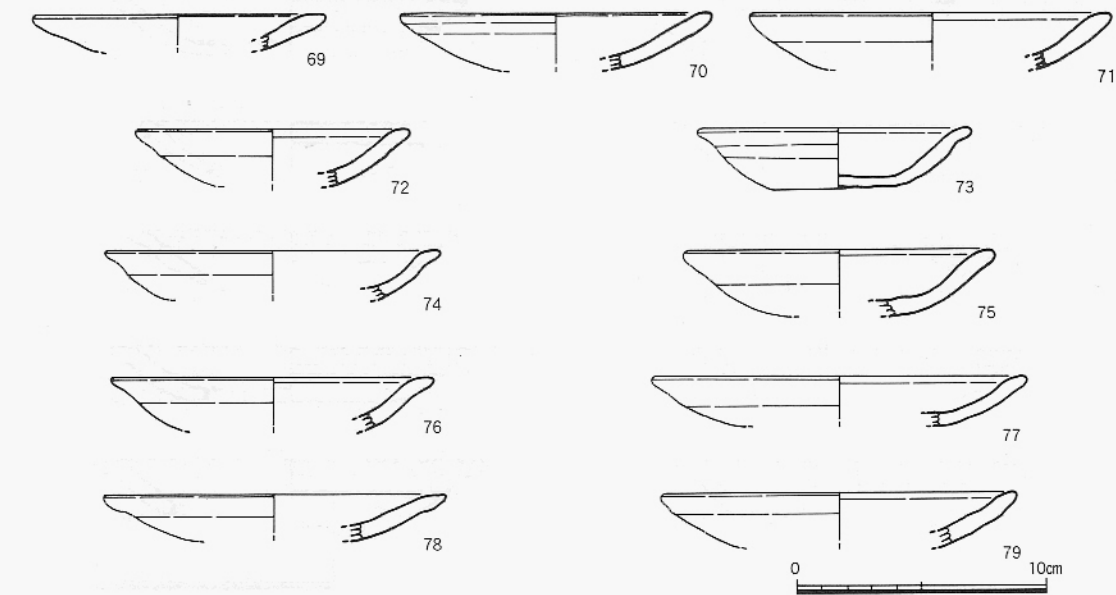
SX028



SX029

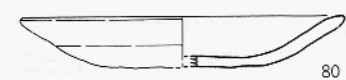


SX031-036-037



第 14 图 B 地点遺物実測図②(1/3)

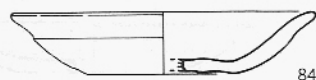
SX038



80



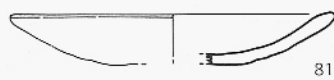
82



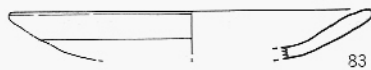
84



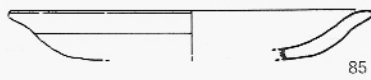
86



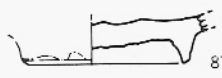
81



83

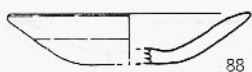


85



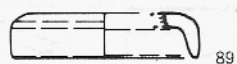
87

SX039

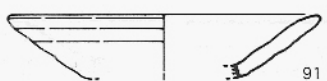


88

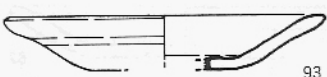
SK040



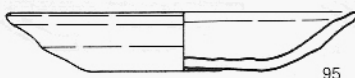
89



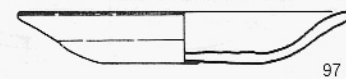
91



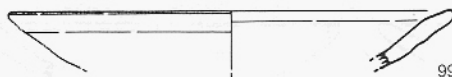
93



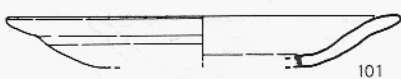
95



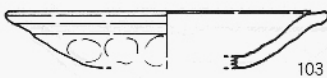
97



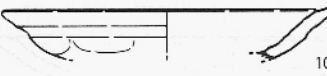
99



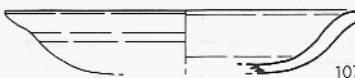
101



103



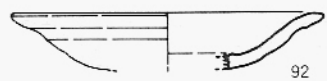
105



107



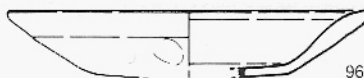
90



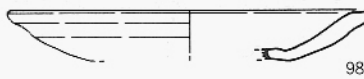
92



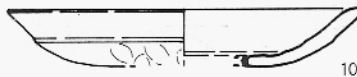
94



96



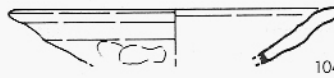
98



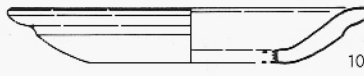
100



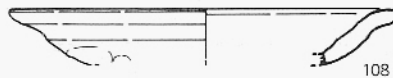
102



104



106

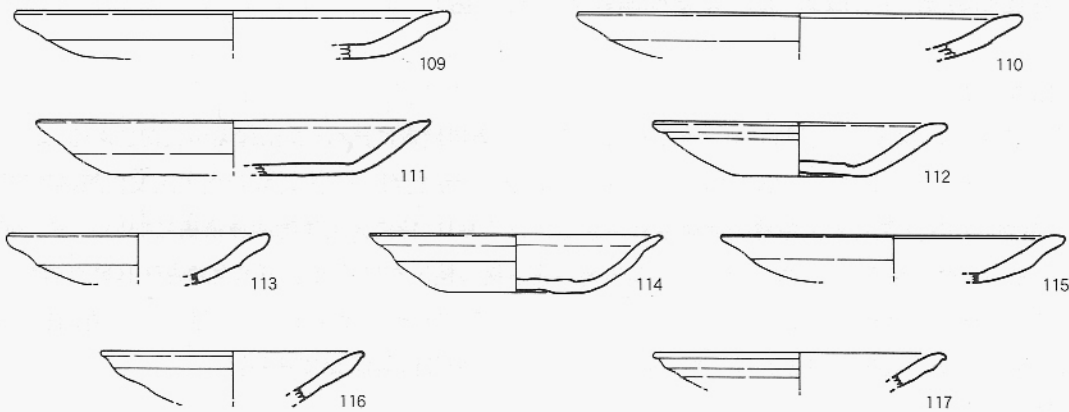


108

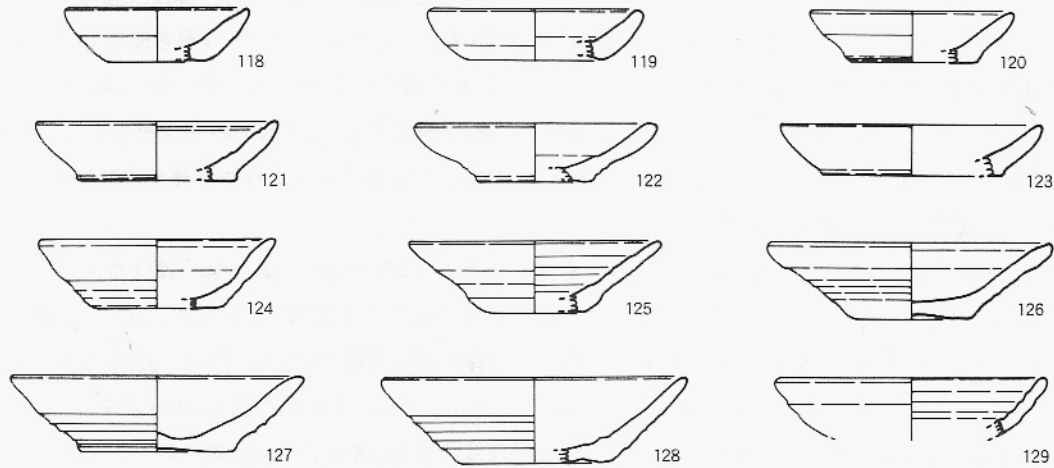


第 15 图 B 地点遗物实测图③(1/3)

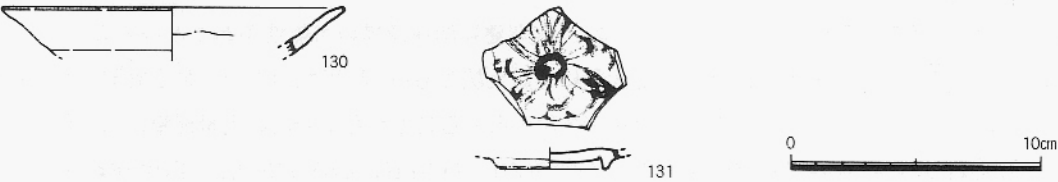
SK040(京都系土師器)



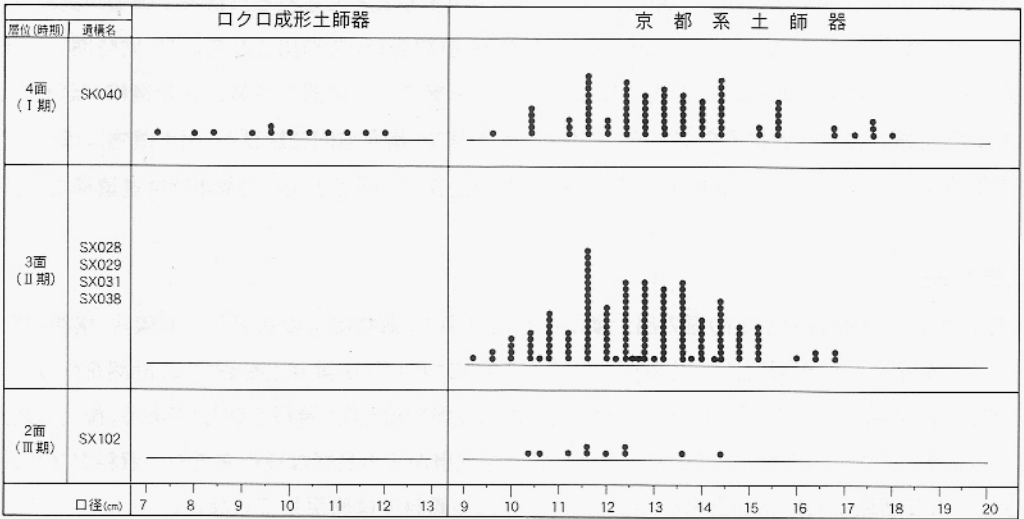
SK040(ロクロ成形土師器)



SK040(磁器)



第 16 図 B地点遺物実測図④(1/3)



※ドットは口径が判明した遺物点数

第 17 図 B地点土師器法量表

2 大友氏館跡第11次調査(推定大友氏館跡の中核地区)

調査区について

第11次調査区は、推定大友氏館の中央部より東に位置し、周辺地形に比べ50cm程高い状況にある。また、明治時代初期の旧字図においてコの字状の地割りに囲まれていたことが判明している。昨年度の大友氏館跡第6次調査において、基壇状の盛土整地と大型建物関連遺構が確認されており、特に大型建物関連遺構について、その遺構の展開及び配置の重要性から、第11次調査では大型建物関連遺構の検出を目的とし、第6次調査区B地点の東、西、北にトレンチを設定し、調査を行った。各トレンチを東から1T、2T、3Tとし、北のトレンチは4Tとした。各トレンチの面積は、1T約11.8㎡、2T約18.6㎡、3T約6.1㎡、4T約12㎡、合計約48.5㎡である。

調査概要

1T、2T、3Tの南壁土層断面(A-A'、B-B'、C-C')から、複数の整地層を確認しており、第6次調査と整合性を持つ(第19図参照)。現地表から表土層(1、2、3、11)の4層、近世以降の整地層(15、16、19、21)の4層を確認している。

今回は、攪乱を含め現表土から暗褐色砂質土層(21: SX005)まで掘り下げ、SX005上面で検出を行い、近世以降の掘込み(SD001・007等)の完掘を行った。完掘後、暗褐色砂質土層を除去し、下層の暗褐色灰色土層(24)上面で再度遺構検出を行い、礫の集中した土坑(SX010)、円形土坑(SX030)、土師器の大量廃棄に伴う土坑(SX013・020・021・025)、溝状遺構(SD012)が確認された。

SX010は、不整形な円形を呈し、遺構中心部に礫の密集した状況が確認された(第20図)。礫は拳大10cm前後の円礫、楕円礫で、白色の玉砂利(1cm大)も見られる。16世紀中葉に比定される京都系土師器が出土した。礫の集中している状況や出土した京都系土師器の年代観、前回調査の大型建物関連遺構の配置状況から、SX010は大型建物関連遺構であると考えられる。第6次調査で確認されたSX090とSX010は、芯心間で約3.5mを計る。

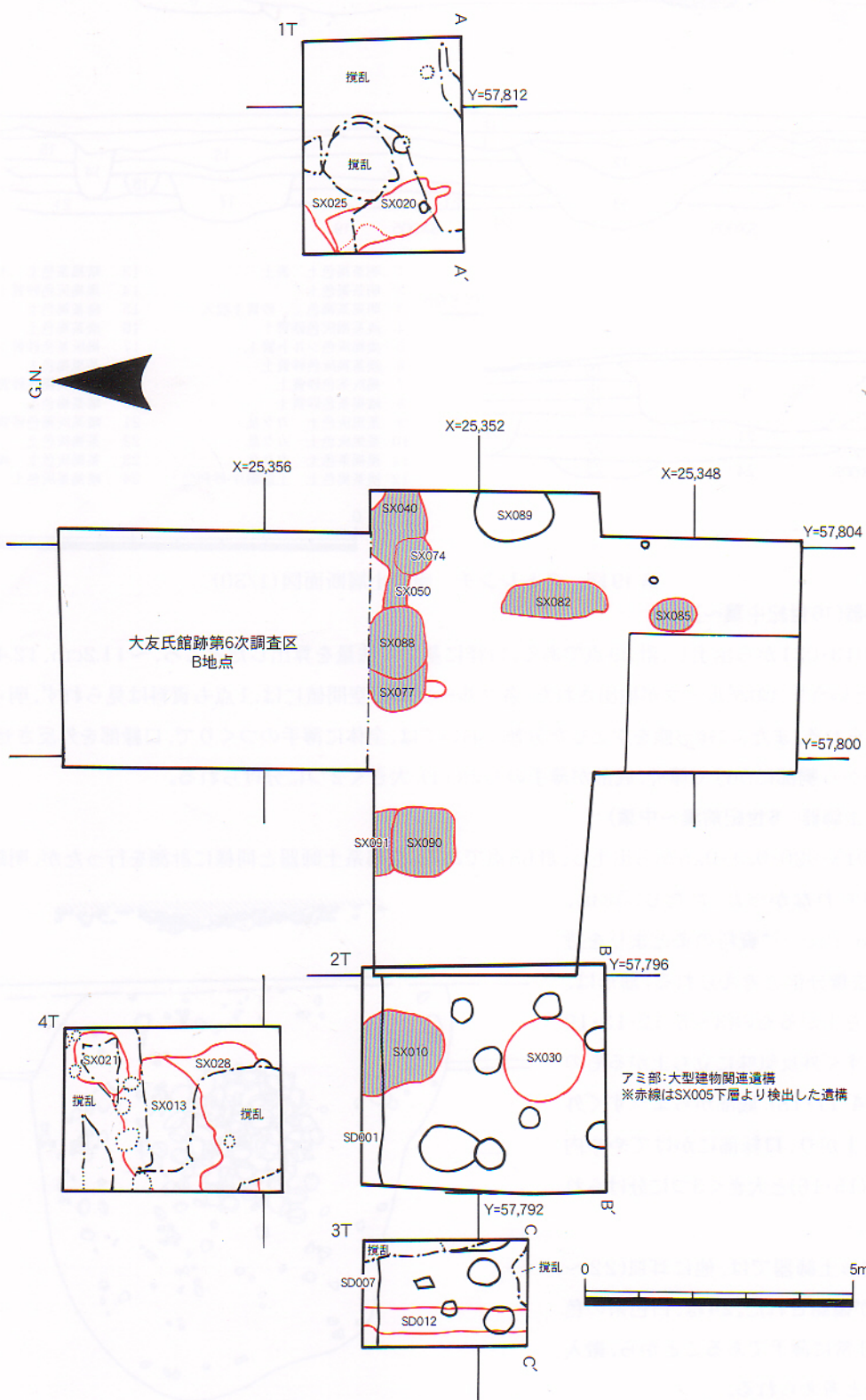
SX010の南には、SX030(径約1.5～1.6m)が検出された。現状では礫、遺物の集中は見られず、SX010とは明らかに遺構の様相に違いが見られる。現段階で大型建物関連遺構の確定はできないが、大形プランであること、検出時の遺物に16世紀中葉の京都系土師器が見られるなど、大型建物関連遺構の可能性があると見える。

SX020・025(1T)、SX013・021(4T)は、土師器を大量に含む土坑である。遺物は、ロクロ成形土師器及び京都系土師器が主体で、完形資料もわずかにあるが、碎片資料が多数を占めることから土師器の大量廃棄行為に伴う土坑＝廃棄土坑と考えられる。これら4基の廃棄土坑には、SX013(古)→SX021(新)、SX025(古)→SX020(新)の切り合いが確認された。また、SX021では、残存率の高い京都系土師器の資料が確認できるが、SX013では、ロクロ成形土師器の残存率が高い資料が多く見られた。SX020・025では、後出すると考えられる京都系土師器が認められず、前段階の遺構である可能性がある。しかし、SX020・025と同標高値(約4.9m)で検出されており、同時期での並存も考えられ、儀器の使い分け等が想起される。また、SX020・025の下層にも土師器を多量に含む遺構が認められた。

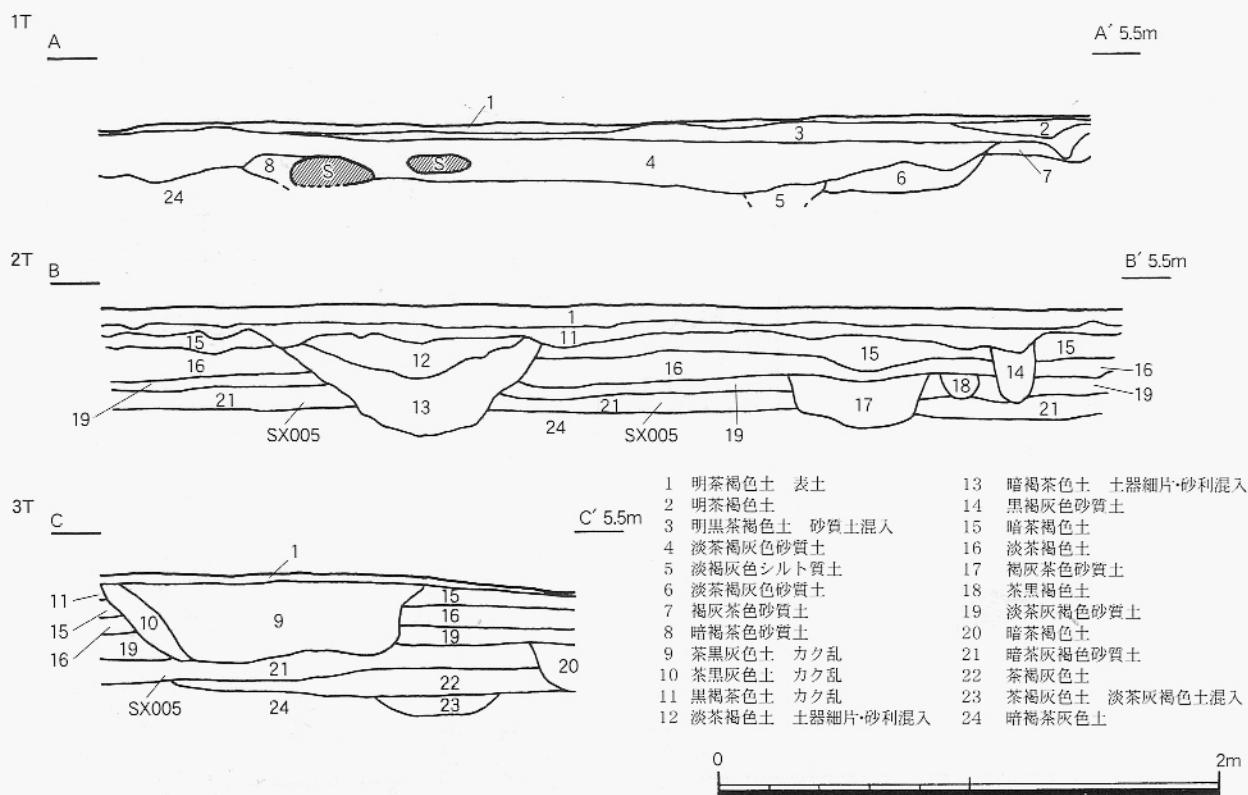
SD012は、3Tで確認された溝状遺構である。皿状の断面形状で、南北方向に延びる。出土遺物は僅少で、破片資料のため時期比定までには至らない。暗褐色灰色土層から切り込んでいる点から、大型建物関連遺構との関連性も窺える。

出土遺物(第21図)

昨年度調査同様に、本調査でも土師器の出土量が圧倒的に多く、遺物出土の状況からも儀式・儀礼に関連する地点であったことが考えられる。出土した土師器の資料の一部について、法量分化を想定し、計測を行った。京都系土師器、ロクロ成形土師器を含め復元可能とした資料は、計93点(SX005出土資料を含む)である。復元可能資料は、法量を算出し残存率1/8以上の資料とした。表土及び上層の整地層からも良好な残存率をもつ資料が多数確認されたが、調査方法により層位学的帰属が出来ないことから、今回の資料では使用していない。



第 18 図 遺構配置図(1/125)



第19図 各トレンチ 南壁土層断面図(1/30)

京都系土師器(16世紀中葉～)

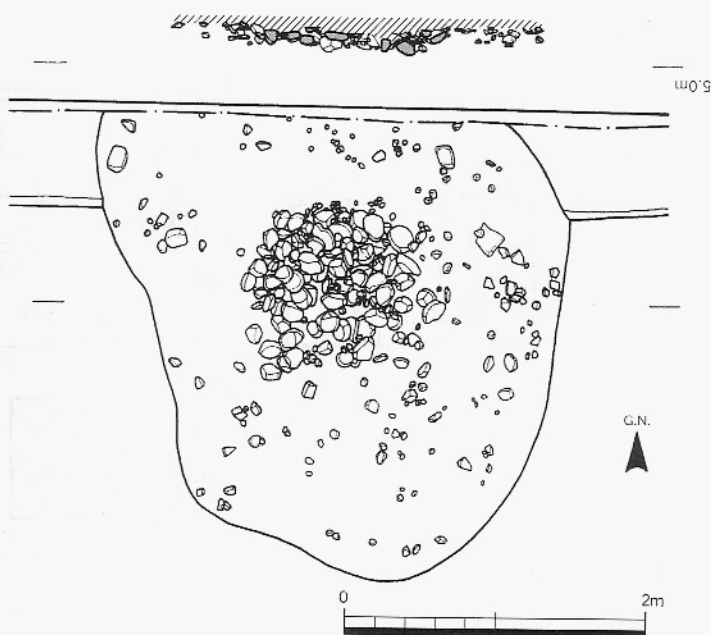
SX005・013・021から出土し、計29点である。口径に基づく法量を算出したところ、～11.2cm、12.4～14cm、15.4cm～という3つのグループが抽出された。各グループ間の空間値には、1点も資料は見られず、明らかな法量分化と考えられる。また、口縁形態を主とした分類においては、全体に薄手のつくりで、口縁部を外反させるもの(9・10)、口縁部から胴部にかけて厚く、底部が薄手のもの(11)、大きく2つに分けられる。

ロクロ成形土師器(16世紀前葉～中葉)

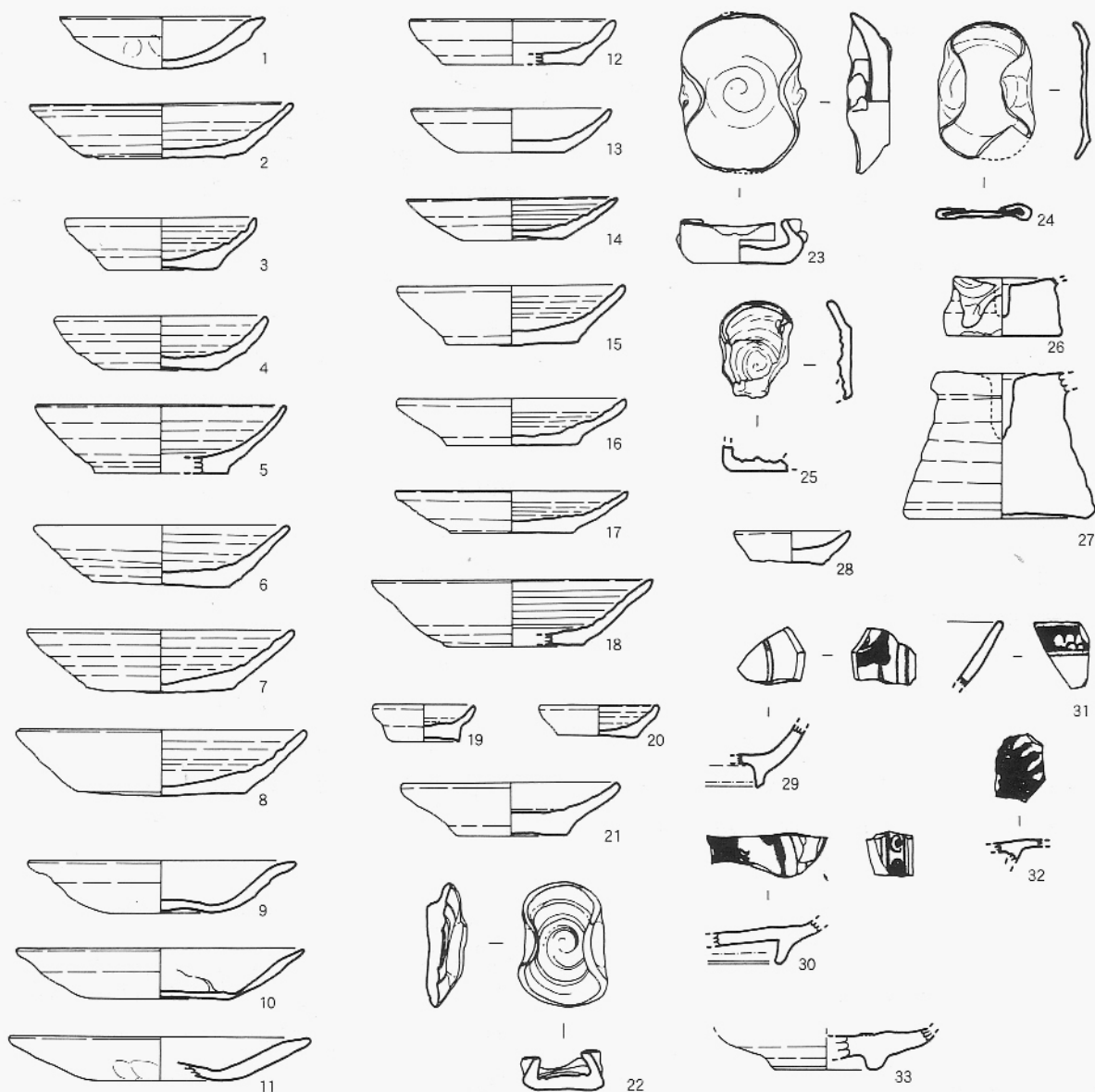
SX005・013・020・021・025から出土し、計65点である。京都系土師器と同様に計測を行ったが、明瞭なグループングは見られなかった。ただし、5cm、9cm、10cm、11cmに資料のまとまりを持っており、法量分化と考えられる。器形は、内湾して立ち上がるもの(3～5・12・13・19～21)、まっすぐ外反気味に立ち上がるもの(2・6～8・14・17・18)、底部からまっすぐ外反して立ち上がり、口縁部にかけてやや内湾するもの(15・16)と大きく3つに分けられそうである。

ロクロ成形土師器では、他に耳皿(22～25)の資料が確認された。24は、白色系の色調をもち、非常に薄手であることから、搬入系の土師器と考えられる。

貿易陶磁器では、15世紀～16世紀代の中国産染付碗C群(31)・E群(29)、染付皿(30・



第20図 SX010(大型建物関連遺構)平面図(1/50)



1, 2, 31, 32 SX005出土遺物
3~8 SX013出土遺物 9~11 SX021出土遺物
12~18 SX020出土遺物 19~22 SX025出土遺物

第21図 出土遺物実測図(1/3)

32)が確認され、また華南三彩(袋物?)、龍泉窯系青磁大皿等が確認されている。他に、燭台(土師質:26・27)、加工土製品、不明鉄製品、砂目段階の唐津焼皿(33)、瓦質土器が出土している。

まとめ

今回の調査で、大型建物関連遺構の西への展開が確認され、第6次調査とあわせた遺構の配置状況から区画性の高い遺構であると想定される。調査区北と東で確認された廃棄土坑は、切り合い関係をもつなど、踏襲しながら機能していたと考えられ、土師器の大量廃棄を伴う行為＝儀式・儀礼が行われていたことを示唆するものである。また、出土する16世紀前葉～中葉のロクロ成形土師器及び京都系土師器がともに、法量分化がみられ、儀器としての使用が考えられることは前述の考えを補完するものといえる。そして、大型建物関連遺構の区画する内側には、廃棄土坑は存在しないことから、大型建物関連遺構と廃棄土坑が存在する東と北では、空間的性格が違うことが指摘できる。以上のことから本調査区が、儀式・儀礼を行う空間、「表」の場である可能性が高く、さらに「表」の場の中心施設である「主殿」の存在が考えられ、大型建物関連遺構が「主殿」の可能性も想定できる。

3 中世大友府内町跡第 19 次調査

調査区について

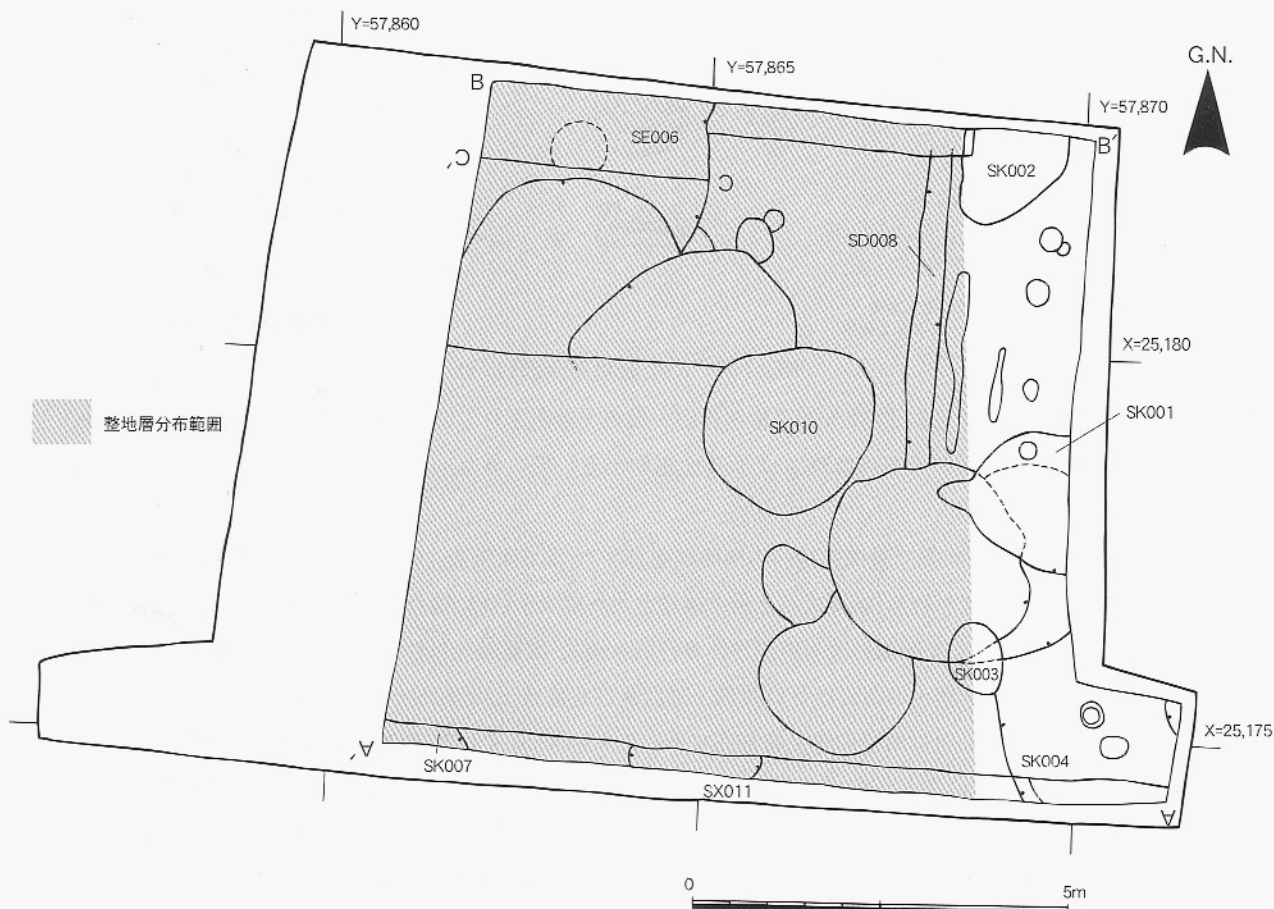
今回の調査区は、大友氏館推定地の南限から約40m南に所在する。調査区の東辺は、館推定地の東辺を延長した線の西側に近接した位置にあり、『戦国時代の府内復原想定図』によれば「大友御蔵場」の東隣にある「柳町」に比定される地点にあたる。

調査地点の北側約20mには、平成12年度に大分県教育委員会によって調査された中世大友府内町跡第8次調査区がある。第8次調査では、館推定地の東辺を南に延長した線に近接して、南北方向に延びる土塁遺構が検出され、大友氏館の南限及び東限との関連が注目された。今回の調査は、この第8次調査の結果を踏まえ、土塁遺構の延長の確認と、大友氏館跡の南限・東限の確認を含めた遺構の性格の把握を目的として実施した確認調査である。

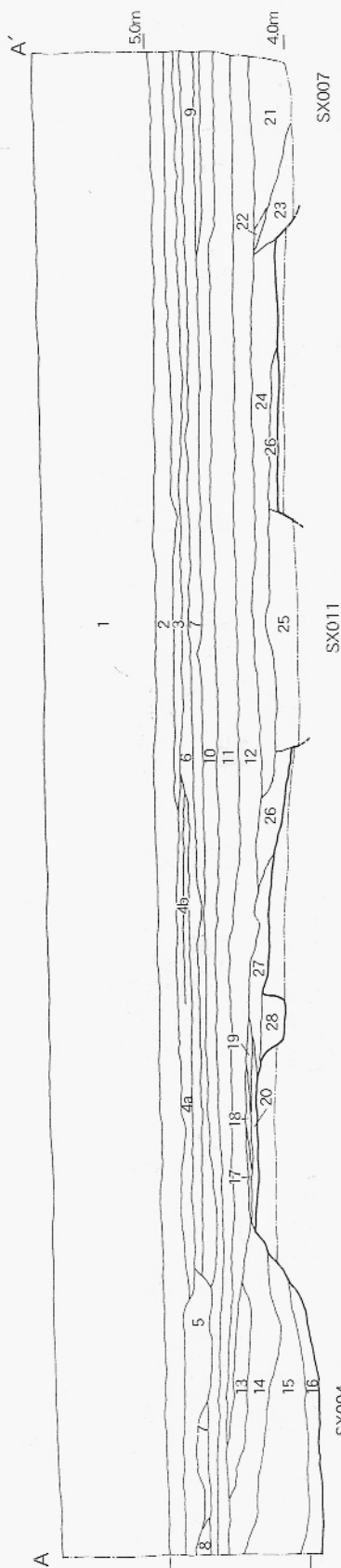
調査の概要

調査の結果、調査区東端においては、南北方向に延びる地山の高まりが検出されたが、土塁と判断される積土遺構は検出されなかった。地山(明褐色シルト質土)の高まりの検出面標高は約4.4mである。また調査区の西半では、地山の標高が東から西に向かって次第に低くなっていることが確認された。この原地形は、複数回の整地により最終的に平坦にされていることも確認されている。整地層の上部(第23図12層・第24図8層)からは唐津焼鉢片(第25図3)が出土していることから最終的な整地の年代は16世紀末～17世紀初頭と推定される。しかし、この段階に比定できる遺構については検出されていない。

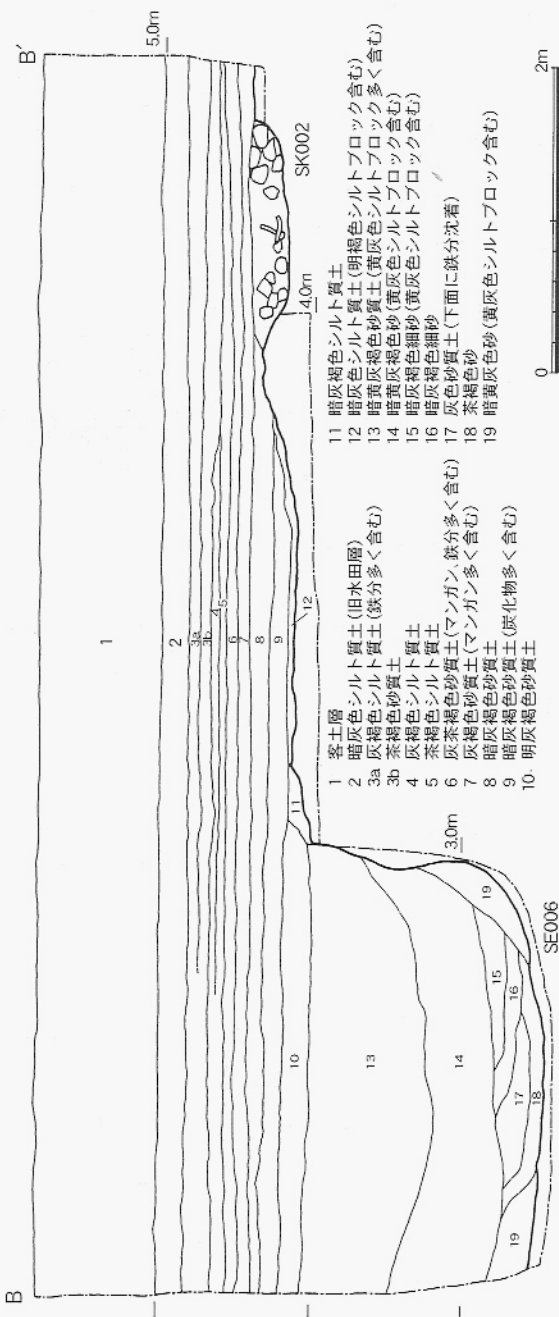
整地層を一部掘り下げたところ、円形の大型遺構が多数切り合って検出された。SE006は整地層の下で検出され、トレンチ調査の結果、瓦質の井筒を埋置した井戸であることが判明した。井筒は口径62cmで、井筒専用に製作されたものである。複数個を積み重ねて使用していたと推定され、土層断面の観察では、井戸廃絶時に上部



第22図 遺構配置図(1/100)



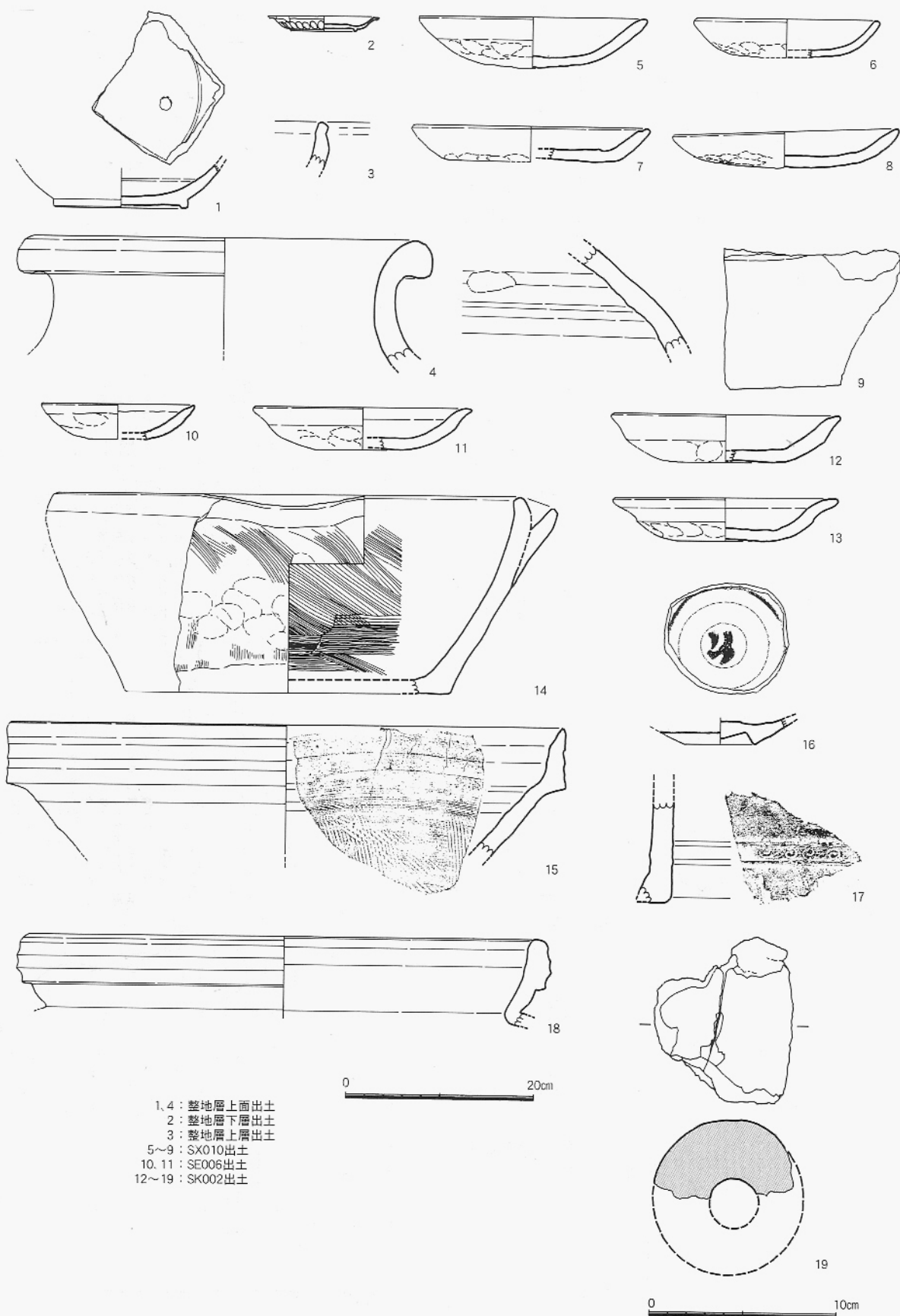
- | | | | |
|---------------------|---------------------------|--------------------------|---------------------------|
| 1 寄土層 | 9 暗茶褐色シルト質土 | 19 暗灰色シルト(ラミナ構造) | 26 暗褐色シルト質土(壁地層下層) |
| 2 暗灰色シルト質土(旧水田層) | 10 暗茶褐色砂質土 | 20 暗褐色細砂(ラミナ構造) | 27 暗褐色シルト質土 |
| 3 暗灰色シルト質土(旧水田層) | 11 暗茶褐色砂質土 | 21 暗褐色シルト質土 | 28 暗褐色シルト質土(明褐色シルトブロック含む) |
| 4a 暗灰色シルト質土(鉄分多く含む) | 12 灰褐色砂質土(移地層上層) | 22 暗褐色シルト質土(炭化物含む) | 29 明褐色シルト(地山土) |
| 4b 暗茶褐色シルト質土(鉄分沈着層) | 13 暗茶褐色シルト質土 | 23 黒灰褐色シルト質土(焼土・炭化物多く含む) | |
| 5 暗灰色粘質土 | 14 暗茶褐色シルト質土 | 24 暗灰色砂質土(壁地層下層) | |
| 6 暗褐色シルト質土 | 15 灰褐色シルト質土(炭化物含む) | 25 暗灰色粘質土 | |
| 7 茶褐色シルト質土(鉄分多く含む) | 16 灰褐色シルト質土(明褐色シルトブロック含む) | | |
| 8 暗灰色粘質土 | 17 明灰色シルト(ラミナ構造) | | |



- | | |
|-----------------------|-----------------------------|
| 1 寄土層 | 11 暗灰色シルト質土 |
| 2 暗灰色シルト質土(旧水田層) | 12 暗灰色シルト質土(明褐色シルトブロック含む) |
| 3a 暗褐色シルト質土(鉄分多く含む) | 13 暗褐色シルト質土(黄灰色シルトブロック多く含む) |
| 3b 暗褐色シルト質土 | 14 暗褐色シルト質土(黄灰色シルトブロック含む) |
| 4 暗褐色シルト質土 | 15 暗褐色細砂(黄灰色シルトブロック含む) |
| 5 暗褐色シルト質土 | 16 暗褐色細砂 |
| 6 暗褐色砂質土(マンガン、鉄分多く含む) | 17 暗褐色砂質土(下面に鉄分沈着) |
| 7 暗褐色砂質土(マンガン多く含む) | 18 茶褐色砂 |
| 8 暗褐色砂質土(炭化物多く含む) | 19 暗褐色砂(黄灰色シルトブロック含む) |
| 9 暗褐色砂質土 | |
| 10 明褐色砂質土 | |

第23図 調査区南壁土層断面図(1/50)

第24図 調査区北壁土層断面図(1/50)



第25図 出土遺物実測図(1/3、18のみ1/6)

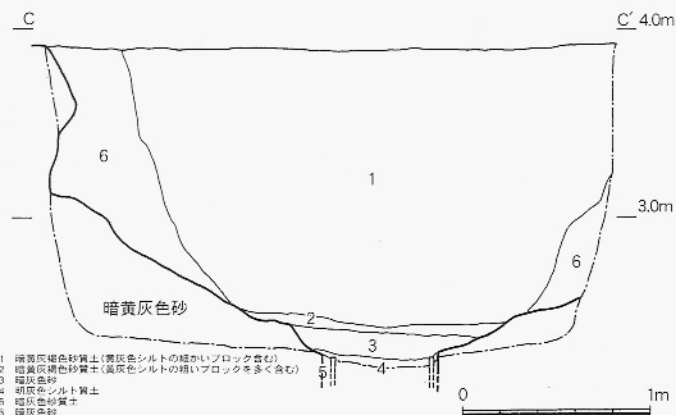
の井筒を掘り上げたとみられる痕跡が認められた(第26図)ほか、埋土中から別個体の井筒破片が出土した。埋土中に包含された京都系土師器(第25図10・11)から判断すると、16世紀後葉にはすでに廃絶していたと判断される。なお、瓦質の井筒を使用する井戸は、中世大友府内町跡では第3次調査に続き2例目となる。円形の大型遺構SX010は整地層下部で検出された。10cm程度掘り下げたのみにとどまるが、タイ産の四耳壺片や京都系土師器が出土しており(第25図5～9)、京都系土師器の年代観により、16世紀後葉～末に位置づけられると考えられる。整地層中もしくは整地層下で検出されたSX010をはじめとする遺構については、埋土やプランがSE006と類似しているものが多いことから、多くは井戸である可能性が高いと判断され、整地部分を中心に多数の井戸が作られていたことが推定された。

整地層の下で検出された南北溝SD008は、京都系土師器が出土していないため、16世紀前葉もしくはそれ以前に遡る可能性がある。しかし、京都系土師器を伴わない遺構はこれ以外に検出されていない。また、整地層の下部(第23図24・26層・第24図9層)においても京都系土師器や青釉稜花皿(第25図2)が出土しているため、整地の時間的上限が16世紀中葉以前に遡る可能性は低いと考えられる。

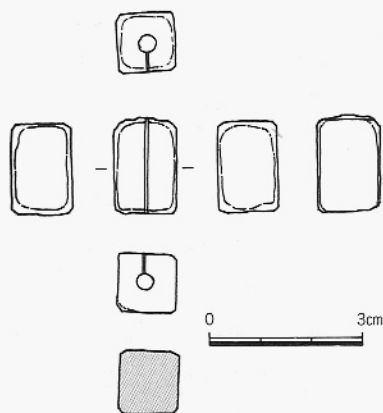
地山の高まり上に作られた遺構のうちSK002・SK003は廃棄土坑と考えられる遺構である。SK002からは焼けたものを含む多数の礫とともに瓦(平瓦・丸瓦)や陶器などが多量に一括廃棄された状態で出土しており、火災処理土坑とも考えられる。出土遺物(第25図12～19)には備前焼(15・18)や瓦質土器(14・17)などの生活雑器を多く含んでいるが、ふいごの羽口(19)も出土しており、生産活動との関連をも窺わせる。16は、少数出土した磁器であるが、漳州窯系のものである。備前焼の播鉢(19)はいずれも交差する播目を有するものであり、天正年間に比定されるものである。また京都系土師器(12・13)は16世紀後葉に比定されるものである。従って遺物の年代観から判断すると、1586年の島津軍による府内侵攻に関連する火災処理土坑である可能性もある。このほか、遺構の性格は不明であるが、SX001・SX004も16世紀中葉から後葉に位置づけられる。

なお、整地層上面からの出土ではあるが注目される遺物としては、タイ四耳壺片(第25図4)やベトナム白磁碗(第25図1)、青銅製分銅(第27図)がある。このうち分銅は、直方体の形状を呈するもので、重量は現状で18.6gを計る。一辺約12mmの正方形をなす小口部分の中心には、直径3.5mmほどの穴が長軸方向に穿たれているようであるが、穴は付着物により埋まっている。また、穴と穴の間の器表面には、幅0.8mm程度のきわめて細かい溝が1条彫られている。

以上のように、今回の調査で検出された遺構は廃棄土坑、井戸および溝等であり、特に整地部分において多数切り合った状態で検出された。こうした所見から本調査地点は、従来の比定のとおり町屋の一部である蓋然性が高いと判断されよう。さらに井戸が多数検出されたことから、町屋の地割の中でも裏庭に近い空間であった可能性が高いと考えられる。今回検出されなかった建物遺構については、標高がより高い調査区東端の地山の高まり部分からさらに東側にあるものと推定される。



第26図 SE006 土層断面図(1/40)



第27図 青銅製分銅実測図(2/3)

第3章 遺物について

今回、大友氏館跡の第10次・11次調査区において多量のロクロ系土師器および京都系土師器が出土した。中でも、廃棄土坑に伴ない遺構の切り合いが見られるもの、整地層内で一括廃棄され層位的に相対関係を把握できる資料を得ることができた。こうしたことから、層位的観点に基づき大友氏館跡内における土器組成と形状の特徴を提示したい。

第10次調査区出土の土師器(第29図)

提示した資料は、最も下層の4面に相当する廃棄土坑(SK040)のロクロ成形土師器と京都系土師器の混在した一群、3面の整地層に京都系土師器のみが一括廃棄された遺物群(SX028・029・031・038)、2面の整地層に伴なうSX102の京都系土師器である。

4面(SK040)は、京都系土師器の特徴として主体をなすのが、A-1類とB-2類である。特に、B類となるタイプで口縁外面が外反し、口縁内側を平らに施しているものが多い。

法量分化については、A-1類が口径10.4cm、12.4～12.8cm、14.0cmであり、B-2類が口径12.0cm、12.8cm、13.2cm、14.4cm、15.6cm、17.2～17.6cmである。A-1類の方がB-2類と比較して口径が小さい傾向にある。

ロクロ成形土師器の主体はb類とc-1類である。法量は、b類が口径7.2～11.2cmであり、c-1類が口径9.2～12.0cmに収まる。b類の方がc-1類と比較して口径が小さい傾向にある。c-1類は、口径と比較して底部が小さく立ち上がりの傾斜角度が緩い。d類は口径が10～12cmの小型品である。

全体として4面の京都系土師器は、2・3面と比較して口径が大きいものが見られるほか、11～14cm台においては一定した数量の土師器が見られる。器形では口径と比較して底径が大きく、器高が2～2.7cmである。底部が比較的平らで、口縁部への立ち上がりが「く」の字形に屈曲するものが見られる。また、器厚4mmと薄いものが多い。

3面にあたるSX028・029・031・038は、京都系土師器の特徴としてA-1類・A-2類・B-1類・B-2類が多い。法量は、A-1類が口径12.8～13.2cm前後で最も量的に多い。A-2類が11.6、12.4～12.8、13.2～13.6、14.0～14.4cmに分かれる。B-1類が10.4～10.8cm、11.6～12.0cm、12.4～12.6cm、12.8～13.2cm、14.0～14.4cm、B-2類が10.8cm、12.3～12.8cm、13.6～13.7cm、14.4～14.8cmである。

4面と比較して、外反して口縁内側が平らに施しているものから口縁部がまっすぐに延びるものが増加する。口径は、11～14cm台に集中し、法量分化が限定されてくる。器形では口径と比較して底径が小さく、器高が2cmを切り、底部に丸みをもつものが見られるようになる。また、器厚は4面よりも少し厚くなり4～5mmのものが見られるようになり、口縁部は丸みをもって厚みを増す。

2面(SX102)の器形は、口径と比較して底径が小さく、底部が丸味を帯びる。法量分化は、3面よりもさらに限定されている。器厚は、口縁部から底部まで5mm前後となり厚目である。また、器高は1.9～2.2cmほどである。

第11次調査区出土の土師器(第28図)

第11次調査区では、検出された廃棄土坑の切り合い関係と土器組成により、京都系土師器を含まずロクロ成形土師器のみの段階SX025・SX020(古相)と京都系土師器導入後のSX013・SX021(新相)によりSX025→SX020→SX013→SX021の変遷をみることができる。

古相(SX025・SX020)のロクロ成形土師器の特徴は、主体がb類とc-1類・c-2類である。b類は、口径と比較して底径が大きく、器高が2cm弱で低平である。c-1類は、器高1.8cmで底部から口縁部に向かって直線

的に延びる。c-2類は器高が2.6～2.8cmで底部から少し外反し、丸みをもって口縁部に延びる。

新相(SX013・SX021)のロクロ成形土師器の特徴は、主体がc-1類である。器高は2.6～2.8cmでSX020と比較して高くなっている。c-2類は器高が2.9cmであり、SX020からの変化が認められないものの、底径の比率が縮小する傾向にある。京都系土師器は、SX021においてA-2類・B-2類など口縁端部の内側を平らに施し、底部が平らなものと底部に丸みをもつものが見られる。

ロクロ成形土師器と京都系土師器の比率は、SX013ではロクロ成形土師器が主体となしていたものから、SX021では逆転して京都系土師器の方が半数以上を占めるようになり、次第に移り変わる状況が看取される。

土師器の変遷

今回の第10次・11次調査区の土器組成ならびに形態的特徴によってSX025(11次)→SX020(11次)→SX013(11次)→SK040(10次)→SX021(11次)→SX028・029・031・038(10次)→SX102(10次)の流れが想定できる。時期的には、今のところ京都系土師器の導入前であるSX025・SX020については15世紀末～16世紀前葉の範疇に、京都系土師器が導入され次第に京都系土師器が主体となっていくSX013・SX021・SK040については16世紀前葉～16世紀中葉、京都系土師器のみが見られるようになるSX028・029・031・038・102・103については16世紀中葉を想定している。

京都系土師器の分類

A類は、底部から口縁部に向って直立するタイプである。端部の処理によって、端部の内面が丸く外面の横ナデが強くないA-1類、端部の内面が平に仕上げられ、外面に弱い横ナデを生じるA-2類、端部の内面は平らで先端部が摘み上げられ外面に弱い横ナデが生じるA-3類に細分される。

B類は、底部から口縁部に向って外反するタイプである。端部の内面が丸く外面に強い横ナデがあるB-1類、端部の内面を平に仕上げ外面に強い横ナデがあるB-2類、端部の内面が平らで先端部が摘み上げられ外面に強い横ナデのあるB-3類がある。

C類は、数量的には少ないが、口縁部の外面のナデ部分が丸く弧を描くように強く施され、端部が外反するタイプがある。端部の内面が丸く外面に強い横ナデがあるC-1類、端部の内面が平に仕上げられ外面に強い横ナデがあるC-2類に細分される。

D類は、口縁部の外面のナデ部分が浅く、強い外反を伴って先細りにシャープに仕上げられたタイプである。

ロクロ成形土師器の分類

a類は、口径7～9cmで立ち上がりも短く器壁は底部付近で分厚い。調整は、内面・外面ともに横ナデを施す。

a-1類は、体部は内湾気味に口唇部に向う。

b類は、口径7～11cm、立ち上がりはa類と比べると少し延びる。体部下半の底部との境は、外反気味でヘラ工具による回転ロクロ調整が残る。内面もロクロによって残った工具痕が少し見られる。

c類は、口径9～12cmで直線的に立ち上がる。口径と器高ともに大きい。口径と比較して底径が小さく、内面・外面にロクロ挽きの痕跡を残す。口縁端部は、面取り調整をおこなっている。

d類は、口径8～11cmで縁部が丸みをもって立ち上がる。内面・外面にロクロ挽きの痕跡を残す。口縁端部は、面取り調整をおこなっている。

土師器 相對時期	京都系土師器	口 口 口 成 形 土 師 器
古 相 (SX025)		a類  b類 
古 相 (SX020)		c-1類  c-2類  d類 
新 相 (SX013)	京都系土師器導入	b類  c-1類  c-2類  d類 
新 相 (SX021)	A-2類  B-2類 	ロクロ成形土師器減少

第28図 第11次調査区出土土師器相對變遷図(1/6)

土師器 相對時期	京 都 系 土 師 器	口 口 口 成 形 土 師 器
4面 (SK040)	A-3類  A-2類  A-1類  B-3類  B-2類  B-1類  C-3類  C-2類  C-1類  a類  b類  c-1類  c-2類  d類 	ロクロ成形土師器未使用
3面 (SX028) (SX029) (SX031) (SX038)	A-3類  A-2類  A-1類  B-3類  B-2類  B-1類 	
2面 (SX102)	A-2類  A-1類  B-2類  B-1類 	0 20cm

第29図 第10次調査区出土土師器相對變遷図(1/6)

第4章 まとめ

1 大友氏館跡の四至

ここでは、大友氏館跡の確認調査と近年の中世大友府内町跡の発掘調査によって判明した調査成果をもとに大友氏館跡の四至について述べてみたい。

「府内古図」に基づく大友氏館北辺の比定地では、平成12年度に実施した大友氏館跡第7次調査と今回調査が行われた第10次調査との2地点で発掘調査が行われている。

この二つの調査所見を照合した結果、共通すると考えられる溝状遺構が確認され、これが大友氏館の北側外郭線に相当する可能性が高くなった。

大友氏館跡第10次調査区のA地点では、推定大友氏館跡の北側外郭線にあたる東西方向に延びる溝状遺構を検出し、さらにこの遺構が、同一場所・同一方向に幾度となく掘削されたものであることが確認できた。これは、平成12年度に推定大友氏館跡北限の北西部に位置する第7次調査区において、数条の溝状遺構が3時期に渡って変遷している状況と酷似する。

共通点としては、最終的に掘削された東西溝(SX041)に多量の礫が詰まった状態であったことである。これは、埋め戻し段階で混入されたものであるが、第7次調査区で確認されたSD041ならびにSD033・006などで見られるような埋土の状況と一致する。さらに、時期的にも16世紀後葉に比定されることから埋没時期も一致している。

また、SX041が西側で掘り込みが途切れる状況は、第7次調査区で確認されたSD006と共通するものである。ともに、最終段階に掘削された溝状遺構であり、これ以降には溝は存在しておらず整地層がその上面を覆っている。SD043・SD044の溝底の標高は約2.5mであり、7次調査区の溝底の標高と同一であった。

以上のような共通事項から、今回検出された数条の掘り返しをともなう溝状遺構は、第7次調査区の溝状遺構とつながることが示唆される。第7次調査の所見からは、2条の溝状遺構が一对として機能していたことから、第10次調査区で検出された東西溝は第7次調査区に見られる溝状遺構の南側の一对と対応する可能性が高くなった。とすれば、第10次調査区で検出された東西溝には、北側に対となる溝がさらに存在することが考えられる。

こうした状況により、推定大友氏館跡北側外郭線は、溝状遺構をともなった第7次調査区と第10次調査区を結ぶライン上になると考えられる。

一方、東側外郭線の比定地では、最近になって急速に発掘調査が進行している。大分県教育委員会により発掘調査が行われた中世大友府内町跡第12次・第18次調査区では、南北方向の大規模な道路遺構が検出されている。

この道路遺構は、16世紀中葉から後葉に存在していたことが確認されており、当初は幅10m程で両側に側溝を伴っていたものが16世紀後葉にかけて次第に幅6m程にまで縮小されたようである。

中世大友府内町跡第12次調査区では、館の北側を走る道路に続くと推定される東西方向の道路遺構も確認されており、先述した南北方向の道路遺構と交わっている。注目すべきことに、この交差点付近では木戸と推定される施設の柱穴も確認されている。

こうした状況は、府内古図における大友氏館東側ないしは北東側の描写や、道路上に設けられた木戸の様子とよく一致しており、南北方向の道路遺構は館東側の南北大路に、東西方向の道路遺構は館の北側の道路に続く名ヶ小路にそれぞれ比定できよう。

従って、16世紀中葉以降において、大友氏館跡東側外郭線は、この南北方向の道路遺構よりも西側に存在する可能性が高いと推定され、館東辺の確定に近づきつつあるといえよう。

大規模な庭園遺構が検出された大友氏館跡第1次・3次調査区は推定南限ラインよりも北に位置するが、ここでは区画遺構は検出されなかった。ところが、このラインの南に隣接する中世大友府内町跡第8次調査では、館

比定地の東限ラインの延長付近で南北方向の土塁が検出されている。この遺構は、幅約4.5m、高さ約0.6mで、16世紀後葉までに2・3回の改修を経たものと観察されている。仮にこれが館に伴うものであるとすれば、館の南限は第8次調査区以南ということになるが、調査においてそこまでの確証は得られていないようである。土塁遺構と同時期と考えられる遺構としては薬研堀状の南北溝、島津軍の府内侵攻の際とも考えられる火災処理土坑群などがあるが、井戸等の生活関連遺構は希薄である。これらに先行する溝状遺構等もいくつか検出されているが、これらをあわせても、遺構分布が散漫なことには変わりないといえる。

このような第8次調査区の調査所見を今回の調査結果と比較した場合、第19次調査区は土塁が検出されなかっただけでなく、井戸を始めとする遺構が多数切り合って検出されるなど、第8次調査区とは大きく異なった空間利用がされていたことが明らかとなった。このような所見から、町屋の一部である蓋然性が高いと判断したが、逆に第8次調査地点を見た場合、その遺構分布状況の特異さが改めて認識できる。検出された土塁遺構が館に伴うものか否かを別にしても、町屋とは異なる場であった可能性が高いといえよう。

以上のような調査結果から判断すると、大友氏館の南限については、大友氏館跡第1次・3次調査区よりも南で中世大友府内町跡第19次調査区よりも北である可能性がきわめて高くなったと考えられる。さらに絞れば、中世大友府内町跡第8次調査区付近であることが有力視できるといえよう。

2 大友氏館の内部施設について

第10・11次調査では、昨年度の調査成果とあわせ館内の施設について新たな所見を得ることが出来た。

第11次調査では、大型建物関連遺構の配置を検証し、西への展開が確認された。また、第10次・11次調査では、廃棄土坑が検出され、第10次調査では、多量の京都系土師器が廃棄された遺構と、整地地業段階での大量廃棄行為が見られた。地山を掘り込む廃棄土坑からは、16世紀前葉～中葉の土師器皿が大量に出土しており、当該地区においてもこの段階から土師器の大量廃棄が認められる。整地地業は16世紀中葉と考えられ、第4次調査でも確認されている。整地地業の砂質土内に、京都系土師器が集中した状態の一括廃棄行為を確認したことも、大友氏館跡関連調査の中で注目される事象である。これらの事象は、館内の空間の利用において、場の区分が存在する可能性を示唆するものである。第11次調査では、廃棄土坑を調査区の東と北で確認し、連続して使用している状況や、法量分化した土師器皿が廃棄土坑内から大量に出土することなどから、儀礼・儀式を行う空間、「表」の場であることを想定した。出土する土師器の年代観から、16世紀前葉～中葉の廃棄土坑の使用が考えられる。しかし、16世紀後葉の資料が出土しておらず注目される。

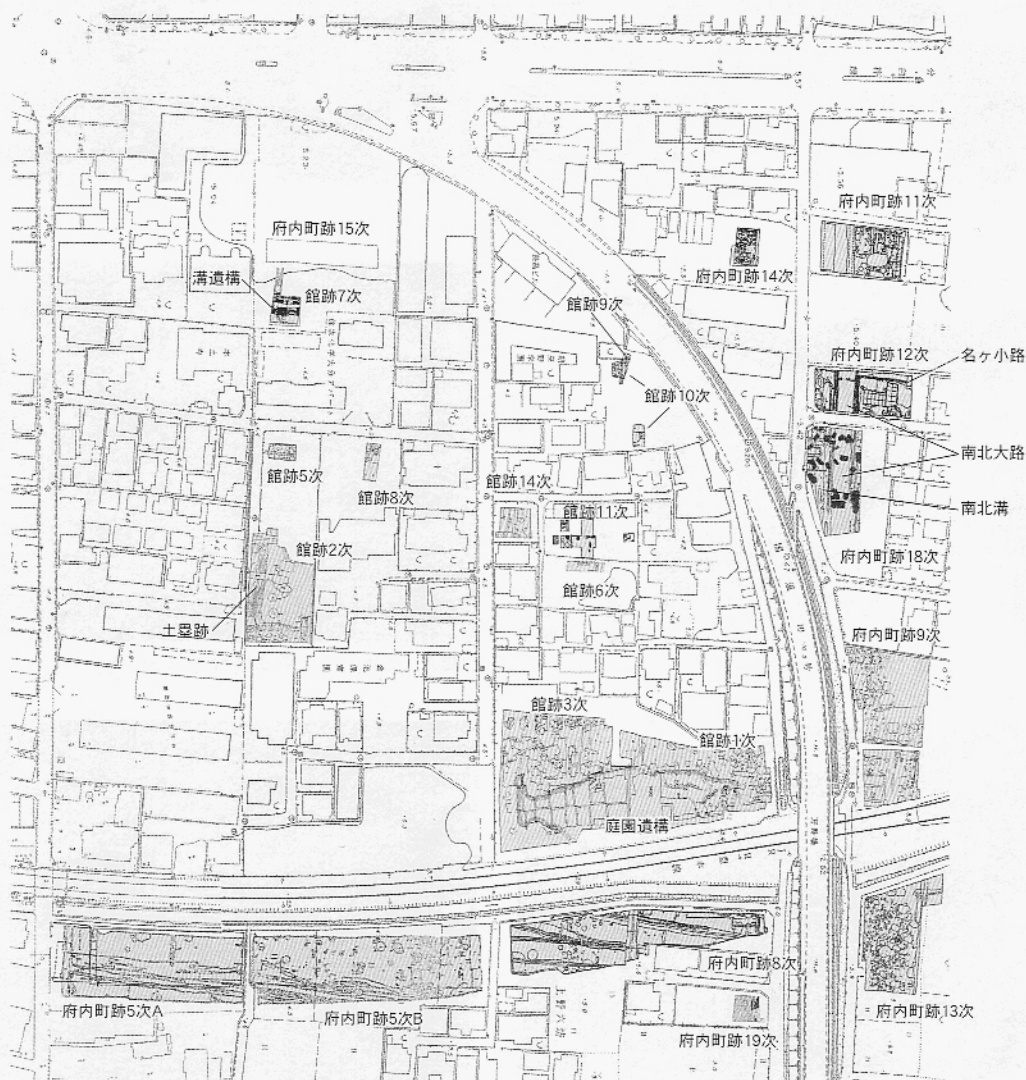
3 今後の課題

第11次調査では、大型建物関連遺構の全体プランを把握するまでには至らなかった。礫、遺物が集中している土坑が、さらに西では確認できていないことから、南ないし北への展開が考えられ、北は廃棄の空間であることから、南への展開の蓋然性が高い。今後の調査で、大型建物関連遺構の配置状況を明らかにし、性格や構造を解明する必要がある。

これまで懸案であった大友氏館跡の四至については、今回の調査成果によってようやく館北辺の確定に大きく近づいたといえる。また、館東辺についてもこれに比定される地域での発掘調査が急速に進行しているところである。しかし、南限については、かなり絞られてはきたものの区画遺構自体は未検出であり、土塁が検出されている西辺においても16世紀後半以降の区画遺構については未検出のままである。加えて、これまでの調査で検出された館の四至に関わると考えられる遺構は、各調査区間で検出された遺構の種類やその帰属時期について未だに微妙な齟齬があり、一時期の館の四至を明らかにするまでには依然として至っていないのが現状である。今後、確認調査を継続するとともに、これまで検出された遺構の帰属時期を詳細に対比することで、館のプランの確定とその変遷の解明を目指したい。

参考文献

- 上田 秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 小野 正敏 1982 「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 大分市教育委員会 2000 『大友館跡—発掘調査概報Ⅰ—』
- 大分市教育委員会 2001 『大友館跡—発掘調査概報Ⅱ—』
- 大分市教育委員会・中世都市研究会 2001 『南蛮都市・豊後府内 都市と交易』
- 大分県教育委員会・大分市教育委員会 2002 『中世府内町跡・大友氏館跡』 現地説明会資料
- 乗岡 実 2000 「備前焼締鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会』 中近世備前焼研究会
- 大分市史編纂委員会 1987 『大分市史 中』 大分市
- 大分市史編纂委員会 1987 『戦国時代の府内復原想定図』『大分市史 中巻付図Ⅱ』 大分市
- 高島豊・河野史郎・塩地潤一 1999 「中世府内の館と町—最近の調査事例を中心として」『大分県地方史 第174号』 大分県地方史研究会
- 小野貴史 2001 「文献から見た大友屋敷」『大分・大友土器研究会論集』 大分・大友土器研究会
- 小野貴史 2001 「大友氏における「式三献」について」『大分・大友土器研究会論集』 大分・大友土器研究会
- 坪根伸也・塩地潤一 2001 「豊後国の土器編年」『大分・大友土器研究会論集』 大分・大友土器研究会
- 小野正敏 1998 「戦国大名と唐物荘厳」『陶磁器の文化史』 国立歴史民俗博物館
- 塩地潤一 1999 「九州出土の京都系土師器Ⅲ」『中近世土器の基礎研究』XIV 日本中世土器研究会



第30図 大友氏館跡・中世府内町跡遺構配置図

大友氏館跡第10次調査区



写真1 調査区全景空中写真(右が北)



写真2 A地点全景(右が北)



写真3 A地点 4面遺構検出状況(南より)



写真4 A地点 東西溝土層断面状況



写真5 A地点 東西溝土層断面状況



写真6 B地点 3面整地層掘り下げ状況(北より)



写真7 B地点 3面整地層土層断面状況(南より)



写真8 B地点 3・4面遺物出土状況(北より)



写真9 B地点 西壁土層断面状況(東より)



写真10 B地点 3面遺物出土状況(北より)



写真11 B地点 4面廃棄土坑(SK040)遺物出土状況(北より)

大友氏館跡第10次調査区

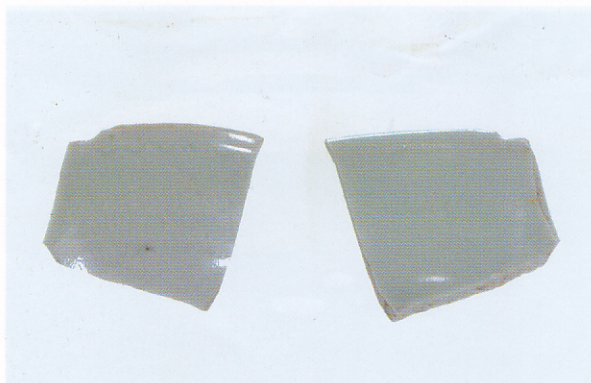


写真12 A区 第4面 中国産白磁碗(表裏)



写真13 A区 SX041上層 陶器壺(表)

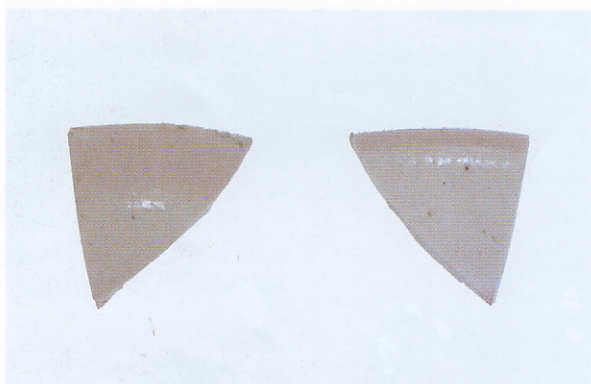


写真14 B区 SX103 中国産白磁皿(表裏)



写真15 B区 SX038 中国産青磁碗(見込／高台内)

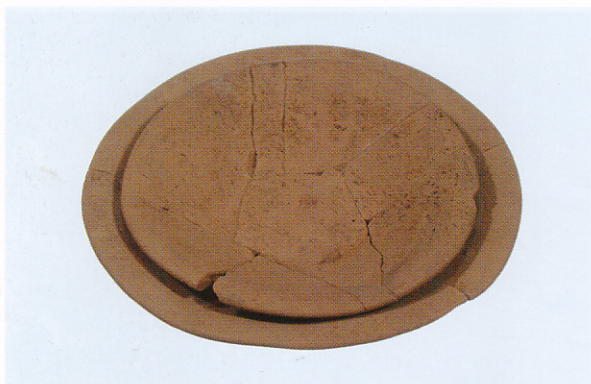


写真16 SX028 京都系土師器皿



写真17 SX028 京都系土師器皿

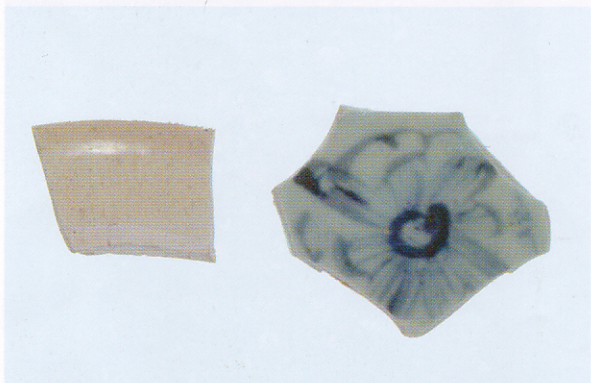


写真18 B区 SK040 中国産白磁皿／中国産染付皿



写真19 SK040 口ク口成形土師器皿



写真1 調査区全景空中写真(上が北)



写真2 SX010(大型建物関連遺構) 遺構検出状況(北より)



写真3 SX010-030 遺構検出状況(東より)



写真4 2T 南壁土層観察状況(北より)



写真5 SD012 完掘状況(北より)

大友氏館跡第11次調査区



写真6 SX020-025 遺物出土状況写真(西より)



写真7 SX025 遺物出土状況(西より)



写真8 SX013 遺物出土状況(北より)



写真9 SX013 遺物出土状況(近景)①



写真10 SX013 遺物出土状況(近景)②

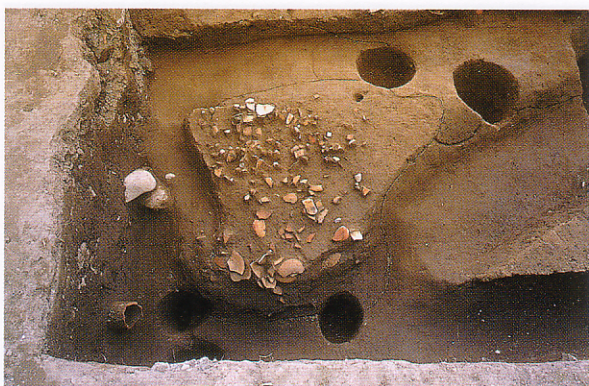


写真11 SX021 遺物出土状況(北より)



写真12 SX021 遺物出土状況(近景)①



写真13 SX021 遺物出土状況(近景)②

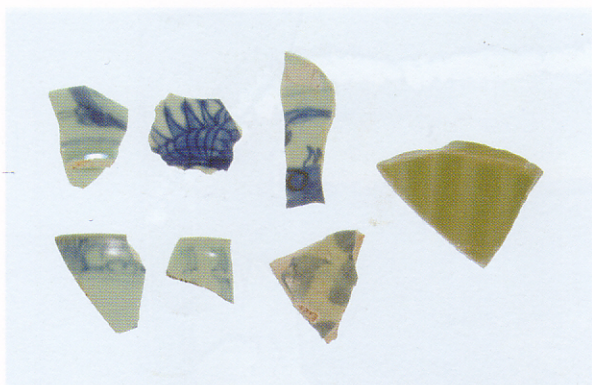


写真14 中国産染付・青磁



写真15 華南三彩



写真16 加工土製品(オハジキ)



写真17 不明鉄製品



写真18 土師器耳皿



写真19 燭台(土師質)



写真20 作業風景①



写真21 作業風景②

中世府内町跡第19次調査区

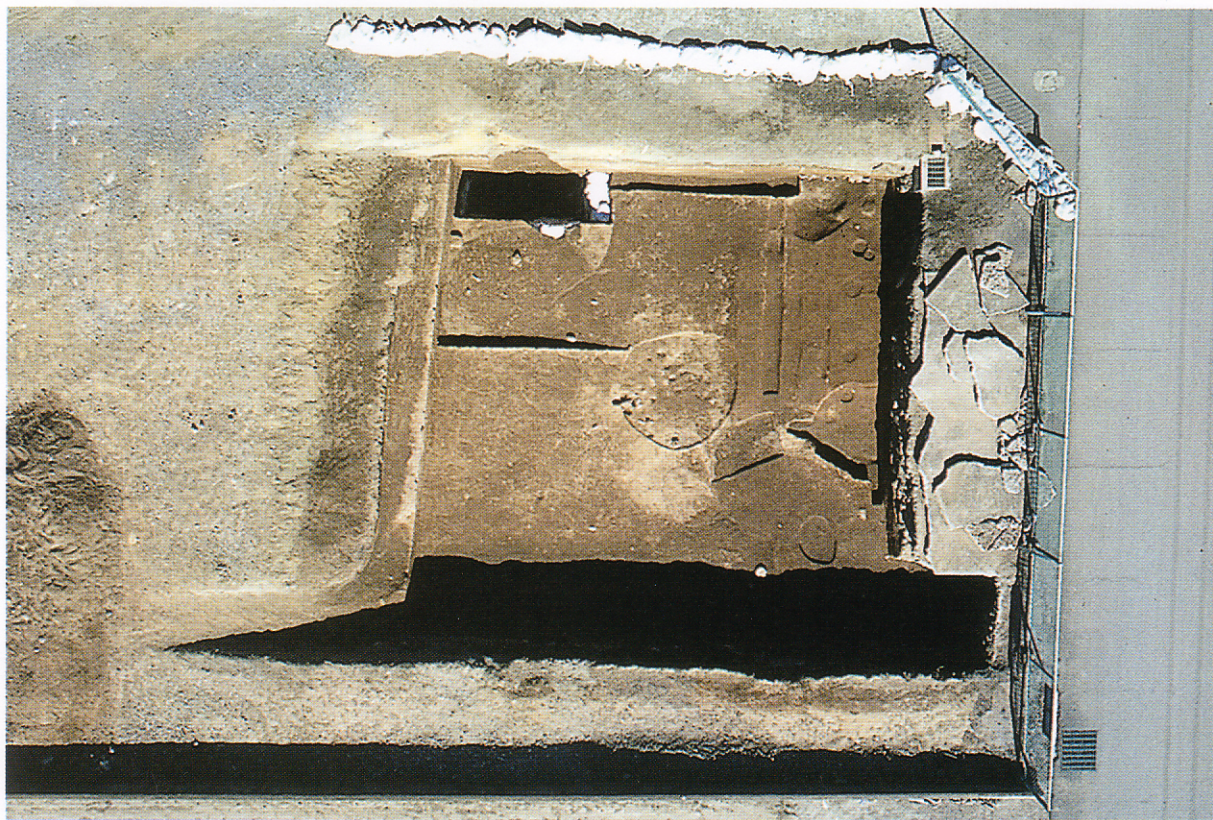


写真1 調査区全景空中写真(上が北)



写真2 調査区全景(西より)



写真3 調査区全景(南より)



写真4 SK002 遺物出土状況(南より)



写真5 SE006 井筒出土状況(北より)



写真6 整地層上面出土 タイ陶器壺

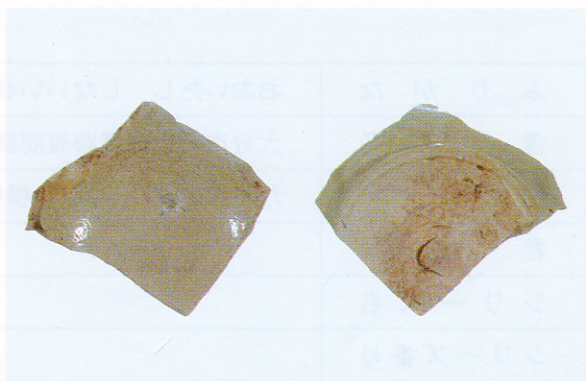


写真7 整地層上面出土 ベトナム白磁碗



写真8 整地層上面出土 青銅製分銅



写真9 SX010出土 タイ陶器壺

調査地区全景



推定大友氏館跡 全景空中写真(上が北 2000年3月撮影)

報告書抄録

ふりがな	おおいたし しないいせきかくにんちようさがいほう
書名	大分市 市内遺跡確認調査概報 -2001年度-
副書名	丹生遺跡群長迫地点・横尾遺跡・大友氏館跡
巻次	-
シリーズ名	-
シリーズ番号	-
編集者名	塔鼻光司・池邊千太郎・高畠 豊・塩地潤一・永松正大・荻 幸二・奥村義貴・小住武史・羽田野裕之
編集機関	大分市教育委員会
所在地	〒870-8504 大分市荷揚町2番31号 TEL (097)534-6111
発行年月日	西暦2002年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積(m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にゅういせきぐんながさこちく 丹生遺跡群長迫地区	大分県大分市 丹生	44201	322191	33° 12' 50"	131° 42' 20"	20011026 ~20011207	1,507	牛舎建設
よこおいせき 横尾遺跡第82-2次	大分県大分市 横尾	44201	-	33° 34' 16"	131° 14' 31"	20010912~ 20011030	88	確認調査
おおともしやかたあと 大友氏館跡第10次	大分県大分市 顕徳町	44201	322028	33° 31' 15"	131° 16' 25"	20011210 ~20020301	75	確認調査
おおともしやかたあと 大友氏館跡第11次	大分県大分市 顕徳町	44201	322028	33° 31' 15"	131° 16' 23"	20011213 ~20020304	48.5	確認調査
ちゅうせいおねともふいまいちあと 中世大友府内町跡第19次	大分県大分市 六坊北町	44201	322051	33° 31' 18"	131° 16' 16"	20011128 ~20020212	106	確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
丹生遺跡群長迫地区	包蔵地	縄文時代早期	炉穴、柱穴	礫器	
横尾遺跡第82-2次	集落	縄文時代・中世	土坑	縄文土器、陶磁器	
大友氏館跡第10次	包蔵地ほか	戦国時代	整地層、廃棄土坑、溝状遺構	土師器皿、中国産染付、 中国産白磁	大友氏館の 北側外郭
大友氏館跡第11次	包蔵地ほか	戦国時代	集石遺構、整地層、廃棄土坑 溝状遺構、土坑	土師器皿、華南三彩、 中国産染付	大友氏館の 中枢施設か？
中世大友府内町跡第19次	包蔵地ほか	戦国時代	土坑、井戸跡、整地層	青銅製分銅 タイ陶器壺、ベトナム白磁碗	

大分市 市内遺跡確認調査概報

—2001年度—

平成14年3月29日

発行 大分市教育委員会

大分市荷揚町2番31号

印刷 株式会社 双林社

大分市碩田町2丁目2番13号